

「多くの日の後」

伊那福音教会 水野晶子



あなたのパンを水の上に
投げよ、多くの日の後、あな
たはそれを得るからである。
朝のうちに種をまけ、夕ま
で手を休めてはならない。
実るのは、これであるか、あ
れであるか、あるいは二つとも良いのである
か、あなたは知らないからである。

伝道11・1、6

伊那福音教会は宣教が開始されてから、今年で40年です。初めて子ども大会が開かれたとき百名以上のお友だちが集まり、お友だちの靴は玄関に入りきれず、用意したお土産も足りなくて買い足しに行ってもらったようなことでした。野外礼拝、クリスマス、キャンプ、何をやっても友だち同士で誘い合って来てくれました。しかし、今はいろいろ工夫して計画するのです。が、お友だちに来てもらうことが至難の業です。学校の校門の前で、チラシを配ると、「けっくっ

です」「まにあってます」と冷たくあしらわれてしまいます。毎週の教会学校は信徒の子ども達です。時々不安になることもあります。そんな時のある聖日、中学校の時まで一生懸命来ていた女の子が礼拝に来たのです。25年ぶりのことです。家庭環境に恵まれなかったこともあり大変心配していました。涙の再会です。「今まで、神様の事を忘れたことはなかった。教会に行きたいと何度も思っていたが、機会がなかった。今日思い切ってきました。」と、それから、熱心に求道し洗礼を受けました。また、もうひとり、教会学校に少しだけ来て、私たちの記憶になかった姉妹が、様々な苦しみの中で何度も教会に行きたいと思っていながら、勇気がなかったのを、家族に押し出されて今求道しています。彼女は教会から出した沢山のお便りやトラクトを封筒と共に大事にとっておいてくれました。40年の教会学校の歩みは、水の上にパンを投げるような虚しさを何度も覚えしました。しかし、それ以上に蒔いた種が、芽を出し、実を結ぶすばらしさを見せていただきました。主の御業を私たちは始めから終わりまで知ることなくできます。だからこそあきらめることなく耕し、種をまき続ける事が私たちの使命かと確信しています。

牧羊者

目次

巻頭言	1
目次	2
カリキュラム	3
カリキュラム解説	4
教師養成講座「聖書の教える人格教育」	5
第二回 人格教育の方法	13
キリスト復活	31
聖霊	55
使徒の働き	91
牧羊ひろば（神戸大石教会）	96
「牧羊者」のご購読・ご利用について	96
おわりに	96

〔凡例〕

1. 原語について：ギリシャ語は〔ギリ〕、ヘブル語は〔ヘ〕、アラム語は〔ア〕で表記しています。
2. 礼拝メッセージ例の最後の「さんび」の略記について
こ：「こどもさんびか」、こ改：「こどもさんびか改訂版」（以上、日本キリスト教出版局）、ホ：「教会学校・日曜学校 子どもさんびか」（日本ホーリネス教団出版局）、イン：「教会学校さんびか」（インマヌエル教会学校部）、ふ：「ふくいん子どもさんびか」、GS：「ふくいんこどもさんびか2 グローイング・ソング」（以上、日本児童福音伝道協会）、PW：「プレイズワールド」（リビングプレイズ）



●復活・昇天

行事

テーマ

聖書

暗唱聖句

4月3日 進級式

エマオへの道 ルカ24:13～32

同31節

10日

見ないで信じる信仰 ヨハネ20:24～29

同29節

17日

キリストの証 ルカ24:44～53

同48節

●聖霊

行事

テーマ

聖書

暗唱聖句

4月24日

キリスト再臨の約束 使徒1:9～11

同11節

●使徒の働き

行事

テーマ

聖書

暗唱聖句

5月1日

聖霊待望の祈り 使徒1:12～14

同14節

8日

母の日 ルツ1:15～18

同16節

15日

ペンテコステの恵み 使徒2:1～11

同4節

5月22日

キリストの名による歩み 使徒3:1～10

同6節

29日

アナニヤとサツピラ 使徒5:1～11

同11節

6月5日

ステパノの殉教 使徒7:54～60

同56節

12日 花の日・子どもの日・キリストの香りとして IIコリント2:12～17

同14節

19日 父の日 放蕩息子 ルカ15:11～24

同24節

26日 サウロの回心 使徒9:1～19

同3節

二〇一六年度カリキュラム解説

三年カリキュラムの最終年となります。教会教育室ホームページからは、今年度カリキュラムだけでなく、三年間分のカリキュラムも、ダウンロードして頂けます。ご参照ください。

①旧約聖書

旧約聖書からの学びは、三年かけてひと巡り学ぶようになっています。今年度はその最終年として、「預言者」「捕囚期」「詩歌」を学びます。よく知られた人物が登場する等、できるだけ分かりやすい箇所が選ばれています。時代背景等も踏まえながら、生き生きとお話し頂ければ幸いです。

②新約聖書

新約聖書からは、毎年、キリストの生涯全体をひと通り学べる形にしています。年度初めからの「キリスト復活」、「聖霊」、「使徒の働き」は、昨年度末のイースターから続き、ペンテコステ等も組み入れ、ルカによる福音書と使徒行伝を中心にした連続性のある単元です。また、秋の「キリストとは誰か」、年末の「クリスマス」、

3月の「十字架への道」は、イエス様のご生涯を扱う単元です。イエス様への信仰が強められる機会となりますように。

③「神の国」

今年度のカリキュラムには、旧新約聖書を貫くテーマとして、「神の国」を扱う単元を入れました。内容的に少し難しいテーマになりますが、よく学び、咀嚼してお話してください。

④教会暦・年間行事によるカリキュラム

教会暦や年間行事を踏まえてのカリキュラムもあります。ペンテコステは新約聖書の学びの中に、新年礼拝は旧約聖書の学びの中に組み込まれていますが、花の日、父の日等、単元の学びから少し離れるものもあります。カリキュラム上のアクセントとして、お用い頂ければ幸いです。

⑤テーマ「キリストと共に生きる」(ヨハネ15・5)

今年度のテーマは、「キリストと共に生きる」としました。「キリストに出会う」(2015年度テーマ)だけでなく、出会ったキリストと共に日々生き抜くことができよう、励まされる時となりますように。

聖書の教える人格教育 第二回 人格教育の方法

徳島栄光教会 森沢尚生



前回の誌上では、聖書には、いわゆる教育ではなく、子供たちの霊（魂、人格）を育てる人格教育（パイデイア）が記されており、それを勧めていることを述べました。さらに聖書は、人格教育の方法も教えています。そこで、今回は、聖書の教える人格教育の方法と実践例を記したいと思います。

人格教育の基本中の基本は、子供を人格として扱うということです。世の中では、子供は善悪の判断がまだつかない保護されるべき存在だから、保護されている期間には子供扱いされてもしかたがないと考えます。確かに、法律や行政といった面で、未成年を保護するためにはある程度の権利を制限し、ある程度の義務を猶予するのは、

正当な扱いだと思います。しかし、子供の人格を育てる場合は、初めから子供を、子供扱いではなく、人格扱いしなければならぬのです。

一、子供を人格として尊重する

マタイ18・1〜10を開いてください。解釈が難しい箇所ですが、少なくとも間違いないことを抽出すると、以下になります。

- ① イエスは様子を招いておられる。 18・2
- ② 幼子を受け入れることは、イエス様を受け入れることになる。 18・5

③父なる神は、幼子ひとりひとりを尊重しておられる。

18・10

①主は、大人と同じく子供を招いておられる。

イエス様は、罪人を罪あるままで招き、罪を取り除かれます（ルカ5・27～32）。医者が病気が治ってから病院に来なさいと言ったりしないように、イエス様は罪を悔い改めてからわたしの元に来なさいとはおっしゃいません。罪人を、罪人のままで招き、罪を取り除かれるのです。おなじく、イエス様は幼子を幼子のまま招かれて、罪を取り除かれるのです。大人になってから来なさいとはおっしゃいません。

②主は、大人と同じく子供を受け入れておられる。

イエス様が子供をありのまま受け入れておられますから、その子供を受け入れるのは、その子供を受け入れておられるイエス様を受け入れることになります。基本的な三段論法でA＝B且つB＝CならA＝Cという論理です。イエス様が子供を受け入れておられる。その子供を私たちが受け入れる。それはイエスを受け入れることに

なるのです。ですから、イエス様を信じる者は、子供だからと軽んじないで、イエス様を受け入れるのと同じくらい尊重して、子供を受け入れるべきなのです。大人もありのままで招かれ、ありのままで受け入れられて、あるべき姿に導かれるのです。子供も全く同じで、ありのままで招かれ、ありのまま受け入れられて、あるべき姿へと導かれていくのです。

③父なる神は、幼子ひとりひとりを尊重しておられる。

また父なる神も、御使いをお用いになって、幼子ひとりひとりを顔と顔をあわせるようにご存じで、やはり子供を尊重しておられるのです。ですから、わたしたちも子供を十把ひとからげにしないで、ひとりひとりを人格として扱うことが求められています。

人は、幼いころから人格扱いしないと、その人格が成長しないのです。人は、神のかたちに造られ、「神に似る」という目的に向かって（創世記1・26）、父母を離れて他の人格と交わり、二人の者が一体となる（他の人と一致協力する）ことが求められています（創世記2・24）。そのためには、幼いころから他の人格と交わり、人間関係

を築く練習が必要であり、ありのままで受け入れられるという経験がその第一歩となるのです。

二、子供がありのまま受け入れられるとは

ありのまま受け入れられるとは、何らかの条件つきではなく、一方的に愛されている状態です。失敗すると罰がある環境では、子供は安全ではなく、ありのままの姿ではありません。他者と比べられたり、競争させられたりする環境も安全ではありません。ここでは、子供は、親や教師に受け入れられるために、よい子を装います。安全でないと子供は生存を危うくされる恐れがあります。安全の価値は生存の懸かった価値であり、善悪、真偽、正誤、美醜、効率といった価値よりも高いのです。ですから、善を身に付けることがいくら大切であっても、自分のいる環境が安全でなければ、子供には善悪の価値すなれば飯を食わさないという環境しか与えなかったら、子供は泥棒になるという仮面をかぶるしか生きられ

ません。ここでは善悪の価値は学べず、泥棒の技術だけを身に付けることになります。

また、ありのまま受け入れられ、失敗が許される環境でないと、子供は挑戦をしなくなってしまう。価値観というものは発見するもので、自分で体験し、発見する環境にないと、人格の成長が妨げられてしまうのです。ですから、ありのままで受け入れられる環境を作ってあげることから人格教育がはじまるのです。

三、ありのまま受け入れられないで

起きる人格障害

赤ちゃんは生まれてしばらく、五感のうち、ほぼ目は見えず、耳は聞こえていません。味覚と触覚と臭覚が先に働きだし、後で視覚、聴覚が身に付いていくのです。この時期の、赤ちゃんにイナイイナイバーをしても見えない聞こえないのです。この時期のコミュニケーションは視覚、聴覚を用いてはほぼできず、泣いてオムツを替えてもらう、泣いて抱っこしてもらう、泣いてお乳をもらうといった、触覚と味覚と臭覚を用いたものとなり

ます。ところが、泣いてもお乳をもらえず、おむつも替えてもらえず、だっこしてもらえないと、泣かない赤ちゃんになります。いくら泣いても欲求に應えてもらえないので、赤ちゃんはコミュニケーションそのものを図ろうとしなくなります。これがサイレントベビーと呼ばれる状態です。おとなしく、育てやすい子供だと思ったら大間違いで、このような赤ちゃんは、人格が育っていないという弊害を内包しているのです。自分が泣いても誰も応えてはくれない、自分はあるのままで受け入れられない、だからコミュニケーションをやめてしまったり、よい子を装って受け入れてもらおうとし始めるのです。

こうしてコミュニケーションをとらなかつたり、装って生きることを身に付けたサイレントベビーが大きくなると、アダルトチルドレンと呼ばれる仮面を被って生きる子供になります。そして本来の人格は幼いままなのに、成長した大人を装っているため、いずれ破綻がきます。普通の子供よりも大人びて見えているのに、すぐにキレたり、実は人間関係を築けていない子供ができあがり、もつと悪くすると、他者の気持ちを読めなかつたり、今何をする時か、ここは何をする場かが読めない

空気の読めない子供になってしまいます。このような子供は、自分だけ集団行動をしなかったり、授業中に立ち歩いたりして、学級崩壊の原因になったりします。

また、自分を装ってしか他の人と交われないと、いづれ装うのに疲れてしまいます。すると、不登校やひきこもりをひきおこしたりします。

最悪の場合は、いじめや殺人を犯す場合があります。相手の気持ちになれない、自分の欲望を抑えきれないため、一度殺してみたかったという動機で無関係な人を殺したりするのです。ここまでくると人格障害と診断されます。人格障害とは、人格が正常に育っていない状態のこと、反社会性人格障害、境界性人格障害、依存性人格障害、乖離性人格障害、多重人格などの症状を呈します。神戸のサカキバラセイトや秋葉原連続殺傷事件の青年や長崎の同級生殺害の少女も、親にありのまま受け入れてもらえず、教育ママ、教育パパに支配されて育っていたことがレポートされていますが、人格が育たなかった顕著な例です。

四―1、ありのまま受け入れてあるべき姿に導く

①母子一体化

ありのまま受け入れられることから始められた子供は幸いです。ありのまま受け入れられているけれども、何をしてもいいのではなくて、してはいけないことがあると学んで、人格が育っていくからです。ありのまま受け入れられない子供は、自分は愛されないんだから、どうしたらなるべく支配者を怒らせないように、できたら気に入られるよい子を装うかに腐心します。そうしているうちに本当の人格は弱く幼く傷つきやすい幼児のままなのに、仮面に仮面を重ねて装い、にっちもさっちもいなくなるのです。

②Aちゃんの例

Aちゃんは、彼の問題行動に悩んだお母さんに、何とかしてほしいと、幼児教室に連れて来られました。Aちゃんは、誰にでも平気で抱き付いてゆきます。そしてビー玉サイズの小さい丸いものは、みんな口に入れてし

まいます。また、他の子供がその子のお母さんに甘えたりしていると、叩きに行きます。他の子が機嫌よく遊具で遊んでいると、その遊具を奪います。Aちゃんのお母さんは、Aちゃんを追いかけて回し、叱りつけ、時には叩き、指を突っ込んで口から異物を出させ、被害を与えた親や子に謝ってまわって、てんてこ舞いでした。とうとう迷惑をかけるので、幼児教室をやめると言い出しました。

さて、Aちゃんが誰にでも抱き付くのは、誰にでもかまっていきたいからです。小さい丸いものを口に入れるのは、自分に注目を集めたいからです。他の子が自分のお母さんに甘えているのが気に入らないのは、自分がかまっていきたいからです。追いかけて、叱り、叩き、強制的に口を開かせて異物を取っても問題は解決しません。

③抱き締めて正す方法

そこで、教師が抱き締めて問題行動をやめさせる方法をして見せました。他の子の遊具を取ったら、Aちゃんを抱き締めて返させる。他の子を叩いたら抱きしめてやめさせる。異物を口に入れたら、抱きしめて出させる。

この方法を見せて、お家でも追いかけたり、叱ったり、叩いたりしないで、抱き締めて、あるべき行動に導いてくださいと指導しました。一ヶ月ほど経つと、Aちゃんに変化が表れてきました。まず、他の人に抱き付いて行かなくなり、さらにしばらくすると人見知りをはじめました。次に、他の子がAちゃんのお母さんに甘えていても、叩きに行かなくなり、それから、数ヶ月たつと、Aちゃんの問題行動は治まっていったのです。

問題は、Aちゃんが、お母さんにありのまま受け入れられていないと感じていたことです。Aちゃんにとっては、自分にはお母さんがいなかったのですが、お母さんができたので、問題行動が治まったのです。怒鳴られ、叩かれ、追い回されている時は、お母さんに受け入れられていないと感じていたのですが、抱き締められて正されることによって、自分は受け入れられているんだと感じはじめたのです。そして、自分は受け入れられているが、してはいけないことがあることに気付いたのです。また、自分には自分のお母さんがいるので、ほかの人に抱き付かなくてもよい、他の子に嫉妬する必要がないということに気付いたのです。

Aちゃんは未熟児に生まれ、何か月かお母さんと離れて病院の保育器で育ち、その後退院して両親のもとに帰ってきたそうです。そのころからお母さんはAちゃんを扱うのにおっかなびっくりで、Aちゃんと距離があつて、母子一体化ができていなかったのです。抱き締めて返させる、抱き締めてやめさせる。抱きしめて吐き出させるという方法は、Aちゃんに『お母さんは僕が嫌いだから叱る、嫌いだからやめさせられる』と感じるのではなく、『僕は、ありのまま受け入れられているけど、してはいけないことがあるんだ』と感じさせることができたのです。このようにありのまま受け入れられることから始めると、お母さんができ、自分にはお母さんがいるから他の人に抱き付かない、ねたまない、問題行動を起こさなようになつていったのです。

四―2、ありのまま受け入れて、

あるべき姿に導く

①母子分離

子供がお母さんに受け入れられて安心している状態

を、母子一体化といいます。母子一体化がおきていると、母子分離ができ、母子一体化ができていないと、母子分離はおきかないのです。一体でないんですから分離のしようがありません。しかし人格教育には、ありのまま受け入れられ、あるべき姿に導かれる、母子一体化と母子分離が不可欠なのです。

②Yくんの例

Yくんはお母さんを叩く子でした。お母さんは元学校の先生で、決して言葉をあらげて叱ったり怒鳴ったりはしません。しかし、これをしなさい、あれはしてはいけませんと、何時も教師の立場に立っていました。Yくんは、機嫌がいいと言うことを聞いていますが、自分の欲求が満たされない時は、お母さんにあたって叩きだすのです。それは、放置しておいてよいレベルの叩き方ではありませんでした。

③Iメッセージという方法

そこでお母さんが叩かれた時に、2〜3歳児の力ですからたいして痛くないのですが、『痛い』『悲しい』と、

子供に向かって言うように指導しました。お母さんも言われたとおり実践すると、一ヶ月ほどするとあまり叩かなくなり、3ヶ月ほどたつと、Yくんはお母さんを叩かなくなつたのです。この方法をIメッセージと言ったりしますが、お母さんが親や教師の立場に立って『しなさい』『してはいけません』と言うのではなく、「痛い」「悲しい」とか「嬉しい」とか、私（英語の『I』）の感情を伝えるという方法です。

Yくんはお母さんが好きで、お母さんに何をしても受け入れてもらっていると安心しています。ですから叩いたり、わがままが言えるのです。すなわち母子一体化はできているのです。しかし、母子一体化しているゆえに『僕がしたいことはお母さんもしたいんだ』と、思い込んでいる。そこに必要なのは、『僕とお母さんは違うんだ』僕がしたいことをしたらお母さんが痛む、悲しむことがあるんだと気付かせることです。ありのままを受け入れられているが、ありのままでもいいんじゃない、あるべき姿というものがあることに気付かせるのが、『I』メッセージなのです。「僕のしたいようにしたら、お母さんが悲しむことがある」「僕のしたいようにした

ら、お母さんが痛むことがある」「だからしたいようにしてはいけないことがあるんだ。」と気付き、どんなこと、どんな場合、どんな時、お母さんは痛むのか、悲しむのか学んでいったら、それが人格の成長なのです。こうして幼児は、幼児年りのその年齢における人格の自立を果たすことができます。

具体的な方法は、抱き締めて直す方法やイメージを伝える方法以外にもできると思います。基本は、ありのまま受け入れ、受け入れられていることに気付かせる。そして、あるべき姿を示して、いつまでもありのままではおれない、あるべき姿があることに気付かせることなのです。これが、子供を人格として尊重し、人格として扱うことの第一歩です。

・ 人格教育の方法は、子供を人格として尊重することです。

・ 人格教育の方法は、子供をありのままで受け入れることです。

・ 人格教育の方法は、子供をありのままで受け入れて、あるべき姿に導くことです。

まず神が、私たちを愛してくださったのです（Ⅰヨハ

ネ4・19）。また、主がわたしたちのために命を捨ててくださった、わたしたちは愛ということを知ったのです（Ⅰヨハネ3・16）。私たちがまだ弱く、まだ罪人で、神の敵であった時でさえ、キリストは十字架に死んでくださった、私たちに對する愛を示されたのです（ローマ5・6～10）。私たちもまた神様にまず愛され、ありのまま招かれ、ありのまま受け入れられ、愛されることから始めて、愛ということを知っていったのです。子供たちの人格もまた、ありのまま受け入れられ、あるべき姿に導かれて成長していくのです。

聖書 ルカ24・13～32 テーマ 霊の目を開かれて

序論

(金井信生)

エマオの村に向かって歩いて二人の弟子は、一緒に歩かれるイエスがわからず、十字架の事実と、復活の知らせについて自分たちの知るところを伝えます。やがて弟子たちの目は開けてイエスだとわかり、エルサレムに戻って、復活の主にお出会いしたことを伝えました。

一、共に歩まれる主

二人の弟子は、イエスの復活の知らせを聞いても、これを信じる事ができずに戸惑ったまま、故郷の村エマオへ帰ろうとしていました。そこにいつの間にか共に歩んでおられたのが、復活された主イエスです。弟子たちが、すぐにイエスとわからなかったのは、不安と恐れに暗い顔をし、希望も答えない議論に終始していたからだけでなく、見ないで信じる信仰に導かれるために、〈目がさえぎられて〉いたからです。

二人の弟子は、まず口を開いて、〈ナザレのイエス〉に

ついて知るところと、聞いても信じられない復活の知らせを伝えます。イエスは正面から向き合って責めたりせず、まず二人の不安やためらいの言葉に耳を傾けてくださいました。

続いて、二人は耳を開いて、イエスが聖書から解き明かされる十字架と復活の言葉を聞きました。死を滅ぼしてよみがえられたイエスは、今も私たちと共に歩まれるお方です。私たちの不安や恐れを聞き取り、み言葉を通して確かな導きを語りかけておられます。主の姿が見えなくても信じる幸いがあるからです。

二、心を燃やされる主

弟子たちは、後になつてから、〈心が内に燃えた〉と振り返ります。それは、イエスが、苦難を通つて栄光に入るメシアの通るべき道を示し、聖書全体からこれを説き明かされたときでした。復活を知らせる婦人たちの報告はありましたが、イエスの姿は見つからず、信じたくても信じられない暗さを感じる中、そこに光があてられ、燃え出したのは、神様のみ言葉です。

平坦な道に進むときには、特別な勇氣は必要ありません。険しい道が目の前にあっても栄冠が約束されている

からこそ、心が燃え、そこを上る力が生まれてくるのです。イエスは、十字架の死の苦しみを通られて、復活の栄光のお姿を現してくださいました。それは、後に続く私たちが苦難を恐れないで信仰に進み、主と共に栄光にあずかるためです。

パンを裂いて渡してくださいしたのは、神の御子が人となってきたのださりと、血が流され命を落とされた、十字架の意味を自分のこととして受け取るためでした。イエスを自分の救い主と信じるとき、私たちも目が開かれ、イエスが共に歩んでくださっていることがわかります。そしていつも聖書のみ言葉によって、正しい道を教え、神様に愛され守られて、こんな私たちでも終わりまで信仰を全うできるのだ、と励まされてゆくのです。

三、復活の生涯に導かれる主

イエスがよみがえられたと信じたとき、弟子たちの内に復活の命があふれました。重い足取りで下ってきた二人は、向きを変え、エルサレムへの上り坂を駆け上がります。そして人目も恐れずに、仲間の弟子たちに、よみがえられたイエスに出会ったことを知らせました。

イエスを信じて救われるとき、私たちは新しい人生に

生まれ変わります。今までは重荷を引きずったままだったのに、十字架のもとにすべての重荷を下ろすことができるのです。恐れや不安を抱いたまま空しく死んでいく他なかった者に、永遠の命が注がれて、主と共に歩み、最後は栄光の御国に凱旋^{がいせん}していく希望が生まれてくるのです。これがイースターの幸いです。

主は、何度も弟子たちの前に姿を現し、両手両足の傷をそのままお見せになって、復活の事実を示されました。三度否定したペテロや、仲間の証言も信じなかったトマス、復活を断固否定し、クリスチャンを迫害する最前線に立っていたパウロなど、みな自分がいかに不信仰であり、罪人であったかを隠さずに伝えました。そして恵みによって救われ、生かされ、今は主の働きに用いていただけの者となったことを証しているのです。

結論

私たちも霊の目を開いていただいて、よみがえられたキリストを信じ、生き生きとした希望にあふれる喜びをいただきましょう。

研究資料

(中島啓二)

ルカ福音書も、イエスの復活の場面を直接には描いていない。御使いたちが女性たちに主の復活を宣言し、それを聞いた彼女たちが他の弟子たちに知らせた。ここに登場する二人の弟子も、彼女たちからそのことを聞いていた。にもかかわらず、その心はなお暗かったのである。

テキスト

13 ふたりの弟子 一人の名はクレオパとある。ヨハネは十字架のそばにクロパ（＝クレオパ）の妻マリヤがいたと記す(19・25)。それがもう一人の弟子かもしれない。エルサレムから七マイル 約12 km。エマオという村 正確な位置は不明。ヨッパへの途上にアムワスという地名があるが距離が32 kmもある。エルサレムの西のアツマウスは距離が6 kmと、半分しかない。もしかしたらルカは往復の距離を記したのかもしれない。

15 イエスご自身が近づいてきて 失意の中にある彼らに、イエスの側から近づいてくださった。信仰も神からの賜物なのである(エペソ2・8)。

16 彼らの目がさえぎられて… イエスの容貌が以前と

変わっていたのではない。マグダラのマリヤの場合と同様(ヨハネ20・14)、霊的な理由で、彼らはイエスに気づけなかったのである。

21 イスラエルを救うのはこの人であろうと この弟子たちはイエスを単なる力ある預言者としてだけでなく、ある種の救い主と見ていた。しかしそれは、当時の一般的な見解である「神の民、すなわちイスラエル」を敵の手から救い出す救い主であり、その望みはイエスの死によつて、消え去っていた。きょうが三日目なのです。彼らは、イエスが以前、ご自身の死の3日目に何かが起こると語られたのを、おぼろげに覚えていたのである。にもかかわらず、数々の出来事から何も悟らなかつたのは、霊的に鈍感と言わざるを得ない。

22・23 わたしたちの仲間である数人の女が… 10節に記されている女性たち。彼女たちは御使いを通してイエスの復活の予告を思い出し、墓が空であることの意味を悟った。そして喜びをもってそのことを使徒たちに伝えたのであるが、彼らはそれを信じなかつたのである。

24 イエスは見当りませんでした 墓が空である事実を弟子たちは確認していた。だがその事実も、死者の中に

イエスを捜す者には、失望しかもたらさないのである。

25 預言者たちが説いたすべての事 間違ったメシヤ理解が、間違ったイエスの死の解釈につながり、その結果が失望となった。それを正すため、イエスは聖書に基づく正しいメシヤ理解を弟子たちに語ったのである。

26 キリストは必ず、これらの苦難を受けて、その栄光に入る これが預言者の指し示すキリスト像であった。

苦難は、栄光のために必要な筋道であったのである。しかし当時のユダヤ社会にメシヤと受難を結びつける思想があったかどうかは疑問である。むしろ一般的には、受難は国家・民族と結びつけられ、メシヤはその苦難からの解放をもたらす使者として期待されていたのである。

27 モーセやすべての預言者からはじめて 旧約聖書は律法、預言書、諸書の三つに分類される。聖書全体にわたりの「聖書(ギリシア語)」は「諸書」の意もあるが、ここでは旧約聖書全体ととらえるのが妥当。

28 なお先へ進み行かれる様子であった このようにして、相手に、もてなしを申し出る機会を与えることは、礼儀になかったことであった。

29 しいて引き止めて 旅人へのもてなしは宗教的にも

高位の美德であった。夕暮になっており その日のメイソンの食事をする時間。5千人の給食も「日が傾きかけた」(9・12)頃であった。

30 パンを取り、祝福してさき… 普通はその家の主人がする作業。それをイエスが行ったのである。これは弟子たちに、前述の5千人の給食、さらに最後の晩餐(22章)を思い出させたであろう。

31 彼らの目が開けて その呼び覚まされた記憶が彼らの目を開き、彼らにはついにイエスを認めるに至ったのである。するとすぐにイエスは見えなくなったが、そのことはもはや彼らに悲しみをもたらさなかった。

32 お互の心が内に燃えたではないか 単なる心の高揚ではなく、それ以上のもの。バークレーは「心が不思議と暖かくなった」と訳す(これはウエスレーのアルダスゲイトの回心を彷彿させる)。後代の信者たちも、この弟子たちのように、よみがえられた主の臨在を認めるところから、内なる心の燃え上がりを経験するのである。

参考図書 注解書 Ellis (NCB), Marshall (NIGTC), Nolland (Word), 榊原康夫(新聖書注解)。その他 The IVP Bible Background Commentary: NT.

聖書

ルカ24・13～32

タイトル

復活のイエス様に出会う

暗唱聖句

彼らの目が開けて、それがイエスであることがわかった。
ルカ24・31

目標

霊の目を開いて頂いて、復活のキリストを見る者となる。

導入

(飯田勝彦)

先週は、イースターでした。イエス様は、週の初めの日、今で言えば日曜日に復活されました。教会は、約二〇〇〇年の間、日曜日に教会に集まり、復活されたイエス様を覚えて礼拝しています。ですから、毎週、イエス様の復活の恵みを頂くことができます。この素晴らしい恵みを皆さんも体験し続けてください。

死より復活されたイエス様

これまで数週間に渡り、イエス様の十字架のお話を聞いてきました。イエス様は、どうして十字架にかかって死ななければならなかったのでしょうか、悪いことをしたからですか？ 一番弟子のペテロはどうして十字架にかかれるイエス様を、お守りすることができな

かったのでしょうか？ みんな覚えていきますか。

イエス様は、十字架にかかるような罪は何も犯されませんでした。でも、私たち人間の醜い罪を赦し、罪から救い出すためにイエス様は、十字架にかかれ死なれました。そして、お墓に葬られたのです。そのお墓の入り口は、大きく重い石でふさがれました。

死とは、悲しく恐ろしいものです。でも、イエス様は死んで終わりではありませんでした。死から復活されたのです。これは、イエス様が前に約束されていることでした。イエス様は、復活を通して、私たちの最大の敵である死を撃ち破り、勝利してくださいました。この復活の恵みを深く心にとめて歩みましょう。

イエス様が分らない弟子たち

イエス様が復活されたその日、二人の弟子たちがエマオの村に向かって歩いていました。二人の話題の中心は、イエス様のことでした。

「なあ、イエス様が十字架で殺されたなんて、信じられないよ」。

「悲しいけど、本当なんだ。でも、そのイエス様が復活されたらしいよ。婦人たちが墓に行ったら、イエス様

がおられなくて、天使たちが『イエス様は生きておられる』と告げたらしい」。

するとそこに、何と復活されたイエス様が来られ、弟子たちが話し合っている内容を尋ねられました。弟子たちは立ち止まって、エルサレムで起こったことを話し始めました。しかし、彼らはそれが復活されたイエス様だと気付きません。それは、彼らの目がさえぎられていたからでした。

もし、私たちが復活のイエス様を信じることができなにとするなら、弟子たちと同じように目がさえぎられています。それは身体の手目ではなく、霊の手目です。

イエス様が分かった弟子たち

復活されたイエス様は弟子たちに、聖書に約束されているご自分のことについて話されました。

弟子たちは、イエス様のお話しが非常に興味深かったのでしょう。もっと聞きたいと思って「一緒に泊まってください」と願いました。イエス様は、それを快く受けられました。

食事の時間になったとき席に座り、イエス様はパンを取り、賛美の祈りを唱えて、パンを裂き弟子たちに渡さ

れました。その時です！ 弟子たちの霊の目が開かれたのです。目の前におられる方が、十字架に架かり復活されたイエス様だと分かったのです。その瞬間、イエス様の姿は見えなくなりました。

弟子たちは「あの方と話しをしている時に、心が燃えていたのは、あの方が復活のイエス様だったからだ」と語り合いました。復活のイエス様に出会った彼らは、このことを他の弟子たちにも伝えました。イエス様に出会った弟子たちは、どんなに嬉しかったでしょうか。

まとめ

復活のイエス様との出会いは、私たちの歩みに大きな喜びを与えてくれます。でも、霊の目が開かれなと復活のイエス様が分かりません。「私も復活のイエス様に出会いたい」と願う人は「私の霊の目を開いて、イエス様が分かるようにしてください」と是非、祈ってください。また、教会学校の先生に祈ってもらってください。皆さんが復活のイエス様に必ず出会うことができ、大きな喜びが与えられますように。

♪よろこびはわがこころに♪ (ホ132)

聖書 ヨハネ20・24・29 テーマ 信仰への招き

序論

(水川武志)

共に集う場（礼拝）に一緒にいなかったトマスは、生きておられる主の顕現に浴する機会を逃してしまいました。礼拝を欠席した結果に伴う失態です。へわたしたちは主にお目にかかった」と証しする同僚の言葉がわからない。霊的顕現ではなく、体の伴った復活体ということが理解できない。このトマスの叫びを、主イエスは聞いてくださったのです。トマスも集う場に、復活の主が再び顕現くださった。そして、み言葉を聞いて信じる信仰の神髄に、世のキリスト者を導いてくださったのです。

一、彼らと一緒にいなかったトマス

トマスがなぜ他の弟子たちと一緒にいなかったのか不明です。殉教の覚悟のできていた（11・16）トマスは、他の弟子たちがユダヤ人を恐れて家に閉じこもっていた時、一人町に出て、食料の確保か、町の様子を見るため外出していたのだと考える人もあります。ライルは「十分な理由もないのに神の民の集まりから離れることは、

いつも賢明でない」と手厳しい見方のあることを紹介しています。確かに共に集う礼拝の場で、生きている主の臨在に触れる事は事実（マタイ18・20）です。トマスの痛みを繰り返さないようにしたいものです。

二、戸惑うトマス

「わたしたちは主にお目にかかった」と証しする弟子たちの言葉を信じられないトマスは、イエスを信じられなくなったのではありません。体の伴う復活ということが理解できないのです。人が確認できる領域を超えた内容だからです。彼のこの戸惑いは、現代の私たちの課題でもあります。墓が空で、遺体が見当たらない状況証拠や、「私たちはお目にかかった」という証言があったとしても、体の伴う復活となると理解できないトマスの正直さに、軍配をあげたくなるのではないのでしょうか。「私は、その体に十字架の痕跡きずあとを確認しなければ、決して信じません」とのトマスの正直な訴えに、同感できるところがあります。トマスは、主の復活を肯定したいために、確かな証拠を手にしたかったのではないのでしょうか。

三、トマスの求めに応えられる主

トマスは、彼をだましたり陥れたりする動機を全く持

たない、親友10人の証言を信ずることを拒否しました。これはとても悲しいことです。

これは、私たちがどんなに意をつくしてイエスの神であることを証言しても、信仰に導けないむなしさを体験した時のことを思い出させます。このような時、「弟子は、トマスに証しをし、彼の不信仰を取り除きとう御座います。主はこの弟子と共に働いてトマスにご自身を現し給います」とバックストンは解説しています。

いつも自分の手と目で確認できない物を信じられない、トマスのような人は多いのです。重体の中風患者をイエスの所に連れて来た人たちの熱心さをご覧になられた主は、中風患者の罪を赦し、病を癒されました。10人の弟子たちは、かたくなに信じることを拒むトマスを、非難したり排斥したりしていません。1週間後の日曜日、彼らはトマスと共に家の内で集います。前週の礼拝の再現です。戸を閉ざした家の中に主イエスが入って来られ、中に立ち、〈安かれ〉とみ声をかけてくださいました。私は受洗して一年目、新生の恵みを頂いたにもかかわらず、罪に勝てない自分に悩まされました。聖餐礼拝で、今日は聖餐を断ろうと決心して臨んだのです。「これは

私たちのために裂かれた主イエス・キリストの御体です」との聖餐式文の言葉を耳にした時、十字架の主の臨在に包まれたのです。「こんな罪人の私のために、身代わりとなって十字架におかかりくださった主イエス様、感謝します」と、パンとぶどう汁を押しいただきました。逆転の祝福でした。

〈あなたの指をここに付けて、わたしの手を見なさい……。トマスはイエスに答えて言いました、〈わが主よ、わが神よ〉。トマスはイエスの復活体に接して、ただ彼が甦り給うたという事実を信じただけではなく、もっと深く、イエスの神性に対する信仰を告白したのです。そしてこれは、この福音書の冒頭にある「言は神であつた」という宣言に相応するものです（高橋三郎）。

結論

トマスの信仰告白は、これ以降の信仰者、すなわち、すべてイエスの姿を見ず、イエスの弟子の言葉による宣教によって、信じて救われる者たちの初めとなったのです（1ペテロ1・8〜9）。「御使たちも、うかがい見たいと願っている事である」（12）。この祝福に与っている事を感謝しましょう。

研究資料

(中島啓一)

テキスト

24 デドモと呼ばれているトマス デドモはギリシヤ語名、トマスはアラム語名で、いずれも「ふたご」の意。共観福音書では名前だけの登場だが、本書では他に2回その言動が記録されている(11・16、14・5)。そこから垣間見えるのは、忠誠心に富むが、悲観的な人物像である。イエスがこられたとき、彼らと一緒にいなかった トマスだけ不在であった理由は不明。悲嘆に暮れる時、仲間と慰め合うのを好む人もいれば、一人で過ごしたい人もいる。悲観的なトマスは後者であったのかもしれない。その時に仲間と一緒にでなかったことは決して責められることではないだろう。

25 その手に釘あとを見、わたしの指をその釘あとにさし入れ、また、わたしの手をそのわきにさし入れてみなければ トマスがこのように言うのは、弟子仲間が彼を説得するべくイエスの肉体の様子について詳細に語ったからだろう。トマスは、彼らが何かを見たことを疑っているのではない。問題は何を見たかである。彼は、弟子仲間が幻影や

幽霊といった実体(肉体)のないものを見たと考えたのである。決して信じない 「疑い深いトマス」というレッテルを貼られるゆえんだが、程度の差はあれ、弟子仲間が女性たちの報告に対してとった態度と根本的には変わらないう。トマスとして、その場にいれば信じていたはずなのである。

26 八日ののち ユダヤでは起点の日も含めて数えるので、7日後、すなわち次の日曜日である。

27 あなたの指をここに付けて：信じない者にならないで、信じる者になりなさい 復活のイエスは、霊だけではなく、手で触れる肉体を持つ存在である(ちなみに教会が直面した初期の異端思想はキリストの肉体を否定する^{ドケチズム}仮現説であった)。イエスはトマスが弟子仲間^{ドケチズム}に言い放ったことをご存知であったので、見るだけでなく、手で触つて確かめよと招かれたのである。もちろんこれは単なる勧めではなく、信仰へのチャレンジである。

28 わが主よ、わが神よ 復活の主を見、またその声を聞いたとき、その体に触れるまでもなく、トマスの心の奥底からこの言葉があふれ出た。これは単なる呼びかけではなく信仰告白である。しかも抽象的な神学的定義ではなく、

「わが」という人格的な告白である。イエスこそ神であり、自分は僕としてその真の神に喜んでお仕えする、との決意表明なのである。意外にも、神という表現がイエスに用いられる場面は極めて少ない（1・1、テトス2・13、ヘブル1・8、Iヨハネ5・20）。そのうちの一つ、「言は神であつた」という本福音書の最初の宣言がこのトマスの信仰告白によつて確証づけられるのである。その意味で、この信仰告白は、本福音書の頂点と呼べる。一度は復活を疑った者が、よみがえった主に対する最高の信仰告白を言い表したのである。

29 あなたはわたしを見たので信じたのか イエスは必ずしもトマスを非難しているわけではない。他の弟子たちもみな、見るまでは信じなかったのであり、彼らがトマスよりも1週間早く信じたのは、1週間早くイエスを見たからである。しかし重要な点はそこではない。見て信じることが、見ないで信じることよりも劣るわけではないし、反対に、見ることができないのは不幸だというのでもない。重要なことは、トマスや他の使徒たちのように復活の主を見る特権にあずかる人たちもいるが、教会の歩みの中では、大多数がそうでない人たちだということである。そして、

その後者も決して不幸ではなく、幸いなのだということである。見ないで信ずる者は、さいわいである よつて「いかなる人たちは、さいわいである」で有名な八福の教え（マタイ5章）と同じ形式で、イエスはこのように語るのである。使徒たちの時代が過ぎ去れば、すべての信者は、見ないで信じなくてはならない。それがなぜ幸いなのかというと、聞いて信じることができるからである。「信仰は聞くことによるのであり、聞くことはキリストの言葉から来るのである」（ローマ10・17）。ヨハネはこのことを知っていたからこそ、「キリストの言葉」、すなわちキリストの物語を、福音書に著したのである。その目的は読む者が信仰に至るために他ならない（31）。トマスは最初の日曜日に不在であつたことで、実質的に、よみがえりのイエスを見ることのできない後世のクリスチャンたちと同じ位置にあつた。この福音書を読んだ最初の読者たちは、イエスを見なかったが、信じた。同様に、現代の読者たちもまた、イエスを見ないが、信じることはできるはずなのである。

参考文献 注解書 Beasley-Murray (WBC), Lindars (NCB) 他。その他 IVP Bible Background Commentary: NT.

聖書

ヨハネ20・24～29

タイトル

イエス様を信じて生きよう！

暗唱聖句

あなたはわたしを見たので信じたのか。
見ないで信じる者は、さいわいである。

ヨハネ20・29

目標

キリストの導きの中で目に見えないキリストを信じる者となる。

導入

(松浦みち子)

新学期を迎えました。新しい教室、新しい友達、担任の先生もどんな人かな？ と不安と期待の毎日でしょう。でも大丈夫！ 今日の聖書のお話しは、みんなと同じようにこれからどうしよう、どんなふうになるだろうと、不安に思っている人がね、目に見えなくても一緒にいてくださるイエス様を信じて勇氣百倍、不安も恐れもふっとんでしまったお話しです。

イエス様にお会いしなかったトマス

イエス様が十字架にかかって亡くなられたのち、弟子たちの様子はどんなだったでしょう。弟子たちは一つの部屋に集まって、「今度は、ぼくたちが捕まえられて、殺

されるかもしれないな」「こわいなあ、どうしよう！」とガタガタ震えていました。そしてしつかりと戸を閉め、鍵をかけた部屋で縮こまっておりました。そんな時のことです。復活されたイエス様が突然、弟子たちのいる部屋にスツと入ってこられ、「平安があるように」と言われました。そして、十字架の釘跡のある手と脇（わき）とを見せられました。復活されたイエス様を見て弟子たちは大喜びしました。ところがその時たまたま、12弟子の一人トマスはその場に居合わせませんでした。しばらくして、トマスが外から帰って来ると、他の弟子たちが口々に大喜びして「私たちは主にお会いしたよ！」と言っています。「えっ。何言ってるんだ。うそだろう！」と全然信じる事ができません。「おいおい、お前たち、気が変になったのかい。死んだ人が生きかえるなんて、そんなバカな話があるか。私は手に釘跡を見、私の指をその釘跡に差し入れ、私の手をそのわき腹にさし入れてみなければ、絶対信じないぞ！」と言いはりました。

トマスに会われたイエス様

それから一週間たちました。その日も弟子たちは戸を閉め、部屋の中にいました。今度はトマスもいます。イ

イエスは鍵のかかった部屋の中にスツと姿を現され、「平安があるように」とおっしゃいました。それからトマスの方を向いて、「トマス、あなたの指をここにつけて、わたしの手を見なさい。手をのばしてわたしの脇にさし入れて見なさい」とうながされました。トマスは触らなくてもよく分かりました。すぐ床にひれ伏し、「わが主よ、わが神よ！」と答えたのです。すると、イエスは、「トマス、あなたはわたしを見たので信じたのか。見ないで信ずる者は、さいわいである」とおっしゃいました。

見ないで信じる者

イエスは、トマスを責めておられるではありません。「トマス、信じていない者にならないで、信じる者になさい」と、見ないでも信じることの大切さを教えてくださったのです。イエスのよみがえりは「えっ！ うっそー」とだれでもが思うような事柄ですが、本当のことなのです。

今、私たちは目でイエス様を見ることはできませんね。どうしたら、今も生きておられるイエス様を信じることができるのでしょうか。それはみ言葉による以外にありません。聖書には、復活の主に出会った人々の真実な証

が書かれています。また、復活の主に出会って人生が変えられた多くの人々の信仰の足跡が残されています。それらを通して、心からイエス様を信じる事ができます。す。「あなたがたは、イエス・キリストを見たことはいが、彼を愛している。現在、見てはいないけれども、信じて、言葉につくせない、輝きにみちた喜びにあふれている」(1ペテロ1:8)と聖書に書かれています。イエスは、トマスとのやり取りを通して、後に生きる私たちのために、「見ないで信じる者は、さいわいである」と言ってくださったのですね。

聖書に書かれていることは本当です。目に見えない神様が、聖書を通して語ってくださっているのです。66巻の旧約聖書、新約聖書には、イエス様が神の独り子としてこの世に来てくださり、十字架にかかって救いの道を開いてくださったこと、信じる者に永遠の命が約束されていることが書かれています。「えっ！ うっそ!」と言わないで信じる者になってください。そうすれば、あなたの毎日は神様の愛と恵みに満ち、喜びでいっぱいの日々になることでしょう。

♪主イエスとともに♪(ホ118、イン80)

聖書 ルカ24・44～53 テーマ キリストの証人として

序論

(小泉 創)

誰でも人生の目的を探しています。夢を見つけて、それに向かって努力していくことは素晴らしいことです。でもどのような仕事、生き方に導かれたとしても、それらを通して神が願っておられるのは、私たちがキリストの証人となることです。

一、主に心を開かれて

よみがえられた主イエスを前にして、弟子たちは喜びながらもなお信じがたい思いでいっぱいでした。主はよみがえられた証拠として、弟子たちに十字架の傷のある手足や、食事をなさる姿を見せられました。それは主が確かによみがえられて、霊などではないことの証拠でした。さらに主は、モーセの律法、預言書、詩篇すなわち旧約聖書は、ご自分について書いてあり、それはすべて成就するとおっしゃいました(44)。主がよみがえってくださったのは、単なる不思議な出来事ではなく、旧約

聖書の約束の成就なのです。聖書を読めば、知識として知ることができます。しかしそれを事実と悟るためには、その人の心が開かれていなければなりません(45)。それは神のみわざです。

キリストの十字架での苦しみ、三日目のよみがえり、それらが私のためであった、キリストこそが私の救い主であると悟るためにも、聖霊のお働きが必要です。主によって子どもたちの心が開かれるように祈りましょう。

二、拡がる福音

キリストの十字架の贖いによって、悔い改める者に罪のゆるしが与えられます。まじめさや、真剣さ、熱心さが救うものではありません。救いは神からのプレゼントです。神にふさわしくないものが、恵みによってゆるされて、人生が新しくされていくことは何と素晴らしいニューズでしょうか。これが福音です。

この福音は、エルサレムからはじまって、もろもろの国民に宣べ伝えられると、主イエスは約束してくださいました(47)。まずエルサレム、そして周囲へと拡がっていくのです。それはユダヤ人ばかりではありません。多

くの国の人々が、主の教えを求めてくると、旧約の預言者も語っています（イザヤ2・3）。そのようにして、異邦人である私たちのところにも、福音は届けられました。教会学校に来ている子どもたちが、まずこの福音をしつかりと受け取っていきましょう。そして福音がその子たちを通して、その友達にも拡がっていくように祈ります。福音はまだまだ拡がっていく余地があるので、主がなしてくださることに期待しようではありませんか。

三、キリストの証人となるために

〈あなたがたは、これらのことの証人である〉と、主イエスはおっしゃいました。弟子たちは復活の主と直接お会いした証人です。それでも、彼らは神の特別な力を必要としていました。ペンテコステの日に聖霊に満たされた弟子たちの姿は、そのことをよく示しています。彼らは神を力強く賛美し、聖書の約束がイエス・キリストの上に成就したこと、キリストを十字架に追いやったのは人々の罪であることを語りました。それを聞いた者たちは強く心を刺されて、御名によって悔い改め、仲間

加わっていきました（使徒2章）。また、弟子たちの姿は、民衆の尊敬を受けていました（使徒5・13）。彼らの言葉だけでなく、生き方そのものが、キリストをあかしするものだったのでしょうか。

私たちがキリストを証しするときにも、救いの確信、喜びは欠かせません。しかし人々への愛がなくては、騒がしいだけで、無益です（1コリント13章）。御霊の実をいただいで、真実な証人とさせていただきたいのです（ガラテヤ5・22）。神はこの世にいる全ての者たちを、愛してくださっているのですから（ヨハネ3・16）。

結論

クリスチャンがこの世に送られているのは、神の愛のあらわれであるキリストを証しするためです。エルサレムにいる弟子たちからはじまって、遠く日本にまで拡がってきた福音が、さらに多くの人々に伝えられていくために、私たちも光榮ある証人として用いていただきましょう。

研究資料

(辻林和己)

今回の聖書箇所はルカの記す第一巻「ルカによる福音書」の終わりの箇所であり、次の第二巻「使徒行伝」につながる箇所でもある。主がここで予告されたことが使徒行伝で次々に実現していく。44～49節は、主イエスがご自分の受難と復活が（旧約）聖書の成就であることを告げられる場面であり、50～53節は、主の昇天を語る箇所である。

テキスト

- 44 わたしが以前あなたがたと一緒にいた時分に 主イエスが地上で弟子たちと「一緒におられた」十字架以前のときに、の意。主は今も彼らと「一緒におられる」が、そのありようは十字架以前と復活以後とは違う。復活された主ご自身と地上で生きている弟子たちは（完全に一つではなく）「離れている」（Ⅱコリント5・6参照）。話して聞かせた言葉 ルカ福音書では、18・31～33。モーセの律法と預言書と詩篇 旧約聖書全体を表わす。45 聖書を悟らせるために 旧約聖書全体が主の受難と

復活を証言していることを理解させるために。

- 45 彼らの心を開いて ここでの「心」は〔ギ〕ヌース。ふつうは日本語では「理性」と訳される言葉。福音書の中でこの言葉が使われるのはここだけである。聖書を読む側の心が開かれなければ聖書を悟ることはできない。心を開いて下さるのは主である。

- 47 その名 イエス・キリストの御名。罪のゆるしを得させる悔改め 悔い改めと信仰は表裏一体であり（使徒20・21）、悔い改めと信仰によって罪の赦しを得られる（ペテロコステ前の10日間、聖霊の光に従ってなされた弟子たちの悔い改めについては、『小島伊助全集1』195、196頁を参照のこと）。エルサレムからはじまって 使徒1・4、8、2・14等参照。「エルサレムから始まる」ことは、本書の続編「使徒行伝」の大きなテーマの一つである。もろもろの国民に宣べ伝えられる 世界宣教、異邦人伝道も旧約聖書に書かれていた（イザヤ2・3参照）。ルカは使徒行伝でさらにこの点を明らかにしていく（使徒10・43、26・22～23参照）。
- 48 これらの事の証人 主イエスの受難と復活の証人、特に「主の復活の証人」の意（使徒1・8、2・32）。

49 父が約束されたもの 「聖霊」のこと(使徒1・5、

8)。**贈る**(ギ)エクサポステロー) 「遣わす」、「送る」

とも訳せる。未来的意味の現在形。近い未来のことを表わす。「今すぐ(間もなく)送る」。**上から力を授けられるまで** 「上」とは「天」すなわち「神」の意。聖霊によつて力を与えられるまで。**都** エルサレムのこと。後に彼らは聖霊を与えられるまで祈った(使徒1・14)。ペ

ンテコステのとき弟子たちに聖霊が降り、この時以来、彼らは「キリストの証人」として自分たちの使命と責任を果たしていくことになる。

50 **ベタニアの近く** ベタニアはエルサレムから約28キロの近さにある村(ルカ19・29、ヨハネ11・18)。使徒

1・12では昇天の場所はオリブ山。**連れて行き**(ギ)エクサポステロー) 「外へ導き出す」。エルサレムのある家の一室から外へ出て行ったことを強調している。**手を**

あげて 両手を上げて。**祝福された** 「大祭司の祝福」

(レビ9・22)を思わせる場面。キリストは大祭司でもある(ヘブル4・14、15)。

51 **天にあげられた** 使徒1・9参照。

52 **彼らはイエスを拝し** 「拝する」(ギ)プロスキュネ

オー)。ルカ福音書の中で、弟子たちが主イエスを礼拝するという意味では、ここでだけ使われている言葉(他には荒野の試みの記事で用いられている。ルカ4・7「ひざまずく」、4・8「拝し」。ルカ福音書では、主イエスの昇天後に、弟子たちが主を神として「礼拝する」ようになったことを強調している。**非常な喜びをもって** この福音書の2・10の主の御降誕を告げる御使いの言葉、「…大きな喜び…」が弟子たちの心にも与えられたことを示す。

53 **絶えず宮にいて** ルカ福音書はエルサレム神殿での祭司ザカリヤの礼拝から始まり(1・8〜10)、同じ神殿にキリストを礼拝する弟子たちがいる場面で終わる。**神をほめたたえていた** 「ほめたたえる」は原文では50節、51節の「祝福する」と同じ言葉(ギ)ユーロゲオー)が使われている。

参考図書 レオン・モリス「ルカの福音書」『ティンデル聖書注解』(いのちのことば社)、榊原康夫『ルカ福音書講解6』(教文館)、他

聖書

ルカ24・44〜53

タイトル

「ぼくも、わたしも、「キリストの証人」!

暗唱聖句

あなたがたは、これらの事の証人である。

ルカ24・48

目 標

キリストによる恵みを知った者として、キリストの証人として生きる。

導入

(和田 治)

「先生! 先週、うれしいことがあったよ。ごんちゃんがお隣のおばあちゃんのお買いものの袋を、持ってあげてたのを見かけたの!」みゆちゃんが教会学校に来るなり、そう言いました。「えー、そうなの。ごんちゃん偉いわね!」ところがたけちゃんが、「うっそー、ごんちゃんがいね!」と信じられない!」って。すると「ほんとよ! 見たんだもん。私が証人よ!」「みゆちゃんっていう証人が居るんだものね、ほんとよね」。このように「証人」っていうのは、「本当に在ったことだとはつきり言える人」のことです。では、今日のみ言葉、「あなたがたは、これらの事の証人である」って、どんな意味なんでしょう?

キリストの証人として

復活なさったイエス様は、弟子たちにごう言われました。「以前、いっしょにいた時、話して聞かせましたね、聖書にあることはみな、必ずそのとおりになると」。イエス様は弟子たちの心の目を開いてくださいました。「そうです。救い主キリストが苦しめられ、殺され、そして三日目に復活することは、ずっと昔から聖書に記されていました。そしてまさにその通りに、私は十字架で死に、そしてよみがえったのです。私を信じる者は、だれでも罪が赦され、救われるのです。この知らせは、エルサレムから始まり、世界中に伝えられます。あなたがたこそ、このことの証人なのですよ!」弟子たちは、今、目の前に、確かに復活されて生きておられるイエス様を見えています。そのお言葉をしっかりと受け止めました。やがて、「イエス様による以外に救いはありません。イエス様はよみがえられた真の救い主です。信じましょう!」と命をかけて伝え始めたのです、キリストの証人として!

聖霊の力によって

でも、こんなふうに思いませんか? 「弟子たちのように『復活されたイエス様』を見たわけじゃないもん。証人になんてなれないよ」って。でもね、弟子たちでさえその

ままでは証人になれなかつたんです。「父が約束してくださった聖霊を贈ります。聖霊がおいでになり、天からの力で満たしてくださるまでは、この都にとどまっていなさい」。そうなんです、聖霊だけが証人になる力をお与えくださるのです。「ただ、聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて、地のはてまで、わたしの証人となります」とイエス様は仰いました。復活されたイエス様を見たことがない私たちでも、イエス様を信じて、聖霊の力をいただいているなら、キリストの証人となるのです！だから、弟子たちのように私たちも、聖霊の力を待ち望むことが大切だってことですな……！

聖霊に満たされ、愛の人に

あなたは聖霊の力をいただいていますか？ 弟子たちがそのことを待ち望んで祈りに祈ったように、神様に祈り求めているでしょうか？ 神様はその祈りに応えて、聖霊の力を与えてくださいます。聖霊は私たちをどんなふうに変えて下さるのでしょうか？ 聖書には『聖霊によって「愛」という実が結ばれます』って書かれています。弟子たちはイエス様に救われた喜び一杯で、福音をどんどん伝えました。でも、彼らの中から「愛」があふれ流れていたからこ

そ、福音は伝わったのです。弟子たちの周りの人たちは弟子たちのことを「すごい人たちだなあ、愛にあふれている！」って感じていたんです。全ての人たちを愛しておられる神様の霊、聖霊が、私たちに臨んで下さるのですから、私たちも愛の人に変えられるのですな。それでこそ「キリストの証人」です。キリストから愛されているから、その愛で家族を、お友達を愛する人……。勉強も、遊びも、全てのことを、キリストの証人として、愛をこめてできるようになるのです！

まとめ

さあ、「神様、弟子たちのように私も、聖霊に満たして下さい。私をキリストの証人に、愛の人にして下さい」って祈りましょう。新学期、新しいお友達に勇気を持ってイエス様を紹介しませんか、聖霊の力で！ そして忘れないで下さい、将来、どんなお仕事をするとしても、キリストの証人として生きるんだってことを。またもし、『あなたは伝道者として生きなさい』という神様の導きをいただいたら、全てを献げ、従いましょう！ それもまた、キリストの証人としての素晴らしい生き方なのです。

♪もちいたまえわが主よ♪（ホ113）

聖書 使徒1・9～11 テーマ キリスト再臨の約束

序論

(高橋頼男)

弟子たちが見ている前でキリストは天に上げられ、雲に迎えられてその姿が見えなくなりました。弟子たちがお天を見つめていた時、二人の御使いが現れ「あなたがたを離れて天にあげられたこのイエスは、天に上つていかれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになるであろう」と語りました。「イエスは、またおいでになる」というキリスト再臨の約束は私たちの大きな希望となりました。十字架、復活、昇天されたキリスト、私たちの主は、再びこの地においでになります。

一、同じ有様で(使徒1・11)

「天に上つていかれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになる」とは、いったいどういうことなのでしょう。主は40日に渡つてたびたびご自身を現され、弟子たちはもはやキリストの復活、キリストが生きておられることを疑うことができない者、すなわち「復活の証人」とされたのです。その後、主は弟子たちの

前で天に上げられました。復活の主を見た弟子たちは、さらに昇天の主を見たのです。主は再び来られるのですが、再臨のお姿は昇天のお姿とは明らかに異なっています。再臨の時、キリストは栄光を帯びて来られます。しかし昇天の時と同じように、再臨の主は目に見える形を取つて来られるのです。今は、目に見えないで私たちと共に、私たちの内に(ガラテヤ2・20)おられますが、その時は目に見える形をとつて来られます。この意味で「あなたがたが見たのと同じ有様」で来られるのです。

「そのとき、大いなる力と栄光とをもって、人の子が雲に乗つて来るのを、人々は見ると」(ルカ21・27)。

選ばれた者たちの救いの完成のために、天地万物が新天地に一新されるためにキリストはもう一度、栄光のうち、目に見える御姿で来られるのです。

二、キリスト再臨の過程と私たちの状況

聖書の言う所によれば、次のような段階を経ることにあります。

①主にあつて死んだ者は、死後直ちにパラダイス(安息の場)に移され、そこで主の再臨の時を待ちます(ルカ16・22、23・43)。

②主が再臨される時、まず、主にあつて死んだ人々が復活し、栄化された体をいただきます（イテサロニケ4・16、黙示録20・5）。

③彼らは空中再臨された主のもとに引き上げられ迎えられます。また生き残っている信者も彼らと共に引き上げられ、空中で主に会い、いつまでも主と共にいることとなります（イテサロニケ4・16～17）。

このようにして、キリスト再臨の約束が私たちに成就されるのです。なんとという素晴らしい救いでしょうか。これが、イエス・キリストにある私たちの救いの究極の姿なのです。

三、キリストの再臨に焦点を合わせる生き方

（ピリピ3・19～21）

このような再臨の約束は、私たちの生き方を一変させます。私たちの価値観、人生観、世界観を全く変えてしまいます。この約束は、私たちの新しい希望となり、人生の目標となり、生きる動力となります。

「我らの国籍は天に在り」（ピリピ3・20、文語訳）。このみ言葉は、葬儀の時や墓碑に刻まれるだけのみ言葉ではありません。再臨信仰の望みを持つ私たちの生き方

を明らかにするみ言葉です。文語訳聖書には、「されど我らの国籍は…」とあります。墓碑には「されど」が欠落してほとんど記されることはありませんが、この一句が大事です。キリストの再臨信仰と希望に生きるものは、この世が全てであるかのごとく生きる人々と生き方が全く異なってしまうからです。是非、ピリピ3章を文語訳で味わってみてください。

「彼らの終は滅亡なり、おのが腹を神となし、己が恥を光栄となし、ただ地の事のみを念ふ。されど我らの国籍は天に在り、我らは主イエス・キリストの救主として其の處より来りたまふを待つ。彼は萬物を己に服はせ得る能力によりて、我らの卑しき状の體を化へて己が栄光の體に象らせ給はん」（ピリピ3・19～21 文語訳）。この望みに生きる者は、十字架に敵対して歩んでいる人々とは一線を画して生きるのです。

結論

私たちの救いの究極であるキリストの再臨を信じ希望に生きる者は、その約束のみ言葉に焦点を合わせ、今の生き方をよく考えて生活を整え、大胆に勇気をもって生きる者とされるのです。

研究資料

(中島啓一)

キリストは復活後40日間の顕現の期間を経て昇天された。直前には「聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて…わたしの証人となるであらう」(8)という聖霊降臨に伴う宣教の開始の約束(宣教命令)が与えられ、直後には「イエスは…またおいでになるであらう」(11)と再臨の約束が与えられている。

この宣教命令、昇天、再臨の約束という流れは非常に重要である。「わたしが去って行かなければ、あなたがたのところに助け主はこない…」(ヨハネ16・7)とあるように、昇天こそが聖霊降臨の合図を告げ、その聖霊降臨を期して教会が誕生するからである。また宣教は、「この御国の福音は…、全世界に宣べ伝えられるであろう。そしてそれから最後が来るのである」(マタイ24・14)とあるように、主の再臨の重要な鍵(かぎ)なのである。

キリストは昇天されたが、「あらゆるものに満ちるために、もろもろの天の上にまで上られたかたなのである」(エペソ4・10)とあるように、「世の終りまで、いつも」(マタイ28・20)、信じる者と共におられる。そして教会

は、主の臨在の満たしのもとで宣教のわざに励みつつ、「アアメン、主イエスよ、きたりませ」(黙示録22・20)と主の栄光の来臨の日を待ち望むのである。

テキスト

9 こう言い終ると、イエスは彼らの見ている前で天に上げられ 7～8節のいわゆる宣教命令で、世界宣教の働きは、イエスが再び来られる時まで、弟子たちに委託・継承された。聖書における継承物語の代表としてエリヤとモーセが挙げられる。エリヤはエリシャへの継承の場面で、つむじ風に乗って天に上げられた(列王下2・11)。モーセの場合は昇天ではないが、ネボ山に登り、そこで葬られ、その職務はヨシユアに受け継がれた(申命34章)。そのふたりとイエスが変貌山で会ったことは実に興味深い(ルカ9・28～36)。雲に迎えられて 雲は神の栄光がそこにあることを象徴するものである。それは「幕屋に満ち」(出エジプト40・34)、「主の宮に満ちた」(列王上8・10～11)。その雲が、昇天のときにイエスを迎えたのである。かの変貌山での出来事でも、「雲がわき起って彼らをおおいはじめた」(ルカ9・34)とある。また、再臨の時には、「大いなる力と栄光とをもって、人の子が雲

に乗って来る……」(マルコ13・26)とある。このように、変貌、昇天、そして再臨のそれぞれの中で、イエスの神学的栄光があらわされているのである。その姿が見えなくなった イエスはよみがえられた時点で、すでに死と罪に打ち勝ち、神の右にあげられていた。40日間は、弟子たちに対する確かな証拠としての顕現の期間であって、それが今や満了したのである。なお、復活の体は栄光の体であって、食べたり、さわったりすることができ、同時に地上の体とは異なる、永遠の世界に属するものであった。

10 彼らが天を見つめていると 変貌山の場面では、「声が止んだとき、イエスがひとりだけになっておられた」(ルカ9・36)とある。このことから弟子たちは、今回も雲が消えた後に再びイエスを見ることができると期待して、見つめていたのかもしれない。白い衣を着たふたりの人が、だが、彼らが見たのはふたりの御使いであった。ルカ文書(福音書と使徒行伝)では、この個所の他に、変貌山(ルカ9・30)と復活後の空の墓(ルカ24・4)の場面であたりの天使的な人物が登場し、重要な証言をしている。ちなみにふたりは証言の有効性のた

めに必要な人数である(申命19・15参照)。イエスの神学的栄光があらわされる三つの場面で、いずれもふたりの栄光に満ちた天使的な人物が登場することから、ここと空の墓の場面の御使いたちが、変貌山で登場したモーセとエリヤである可能性も否定はできない。

11 なぜ天を仰いで立っているのか この質問にはイエスが彼らのもとにとどまることを期待している弟子たちに対する叱責の調子が込められている。すでに弟子たちには事の成り行きが告げられていたからである。あなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになるであろう弟子たちはイエスが力と栄光のうちに行くのを目撃した。それと同じように、力と栄光のうちにイエスは再び来られるということである。この世界には神のはっきりした意志と計画がある。私たちは忍耐と希望をもって主の来臨の日を待ち望みつつ、聖霊に導かれて生きるように求められているのである。

参考文献 注解書 久保泰昭(新約聖書講解6)、斎藤篤美(新聖書注解新約2)、Marshall (Tyndale), Bruce (NICNT)。その他 中島彰『主の復活の証人とこ』、The IVP Bible Background Commentary: NT。

聖書

使徒1・9～11

タイトル

キリスト再臨の約束

暗唱聖句

イエスは、天に上って行かれるのをあなたが見たのと同じ有様で、またおいでになるであろう。

使徒1・11

目標

復活・昇天の主は再び地においでになることを信じる。

導入

(土屋開夫)

みんなは空を見上げる事がよくありますか？ もしかしたら下ばかり向いている子もいるかも知れません。私も子どもの頃、よく下を向いて歩いていました。でも空を見上げると、神様が造られた素敵なものが見えます。きれいな青い空、いつも形の違う白い雲、雨の後は虹が出る時もあります。不思議な色の夕焼けや、夜は明るい月やまたたく星も見えるでしょう。ぜひイエス様の事を考えながら、時々空を見上げてみてください。

よみがえられたイエス様に会えた喜び

一か月前の日曜日はイースターでしたね。弟子たちや

女性たちは大喜びでした。イエス様が十字架に架かって死なれ、お墓に葬られ、陰府に下られた時は、弟子たちは悲しみと絶望のあまり、心は下ばかり(死、墓、陰府)向いていました。でも、よみがえられたイエス様に会い、みんなの心は驚きと喜びで興奮した事でしょう。

「良かった！ これからは、またイエス様とずっと一緒にいられるんだ。しかもイエス様は死にさえ打ち勝たれたんだ！ このイエス様が一緒なら、もう本当にボクたちは怖いものなしだ。」

天に昇られるイエス様

イエス様は四十日の間、何度も弟子たちに姿を現されました。弟子たちはどんな事を考えていたのでしょうか？ 「イエス様、いよいよこの国を立ち上がらせてくださるんですか？ イスラエルの王様になられるんですか？ 今度こそ私たちも頑張りますよ。エイ、エイ、オー」

でもイエス様が繰り返しておっしゃるのは「父の約束を待っているがよい」とか「あなたがたは間もなく聖霊によつて、バプテスマを授けられるであろう」とか「ただ、

聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて……」と、聖霊を待つ事ばかりでした。

そしてその話をされた後、なんとイエス様は弟子たちの見ている前で体が宙に浮き、どんどん天に上がっていききました！ イエス様のお姿はどんどん小さくなり、遂に見えなくなってしまいました！

弟子たちはどんな気持ちだった事でしょう。「え、ええー、あらー……」ポカーンと口を開いて空を見上げたまま、何が起きたのかよく分からず、立ち尽くしてしまった事でしょう。まさにビックリポンです。これからずっとイエス様と一緒にいられると思っていたのに。

イエス様は一体どこに行かれてしまったのでしょうか？雲の上でしょうか、宇宙でしょうか？ いいえ、天国の父なる神様の隣りに行かれたのです。

再び来られる約束

そんな弟子たちの前に二人の御使いが現われ、「なぜ天を仰いで立っているのか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになるであらう。」と告げました。これを「再臨」と言います。イエス様は神の子ども達を天国に迎えるため、そして神様のご計画を完成させるために間もなく再び来られるのです。

「ええー？ 本当にイエス様は雲に乗って、天からまた来られるの？」と不思議に思うかも知れませんね。でもどんなに不思議でも、聖書に書いてあるイエス様の約束は真実です。しっかりと信じてくださいな。

まとめ

勿論、イエス様は今も信じる私たちと共にいて下さいます。でも今は目に見えないし、触れる事も出来ませんね。だから輝く姿のイエス様が天から来られるのが本当に楽しみです。私も時々空を見上げながら「まだイエス様は来られないのかなー」って思います。でも、だからと言って、ずーっと空をポカーンとただ眺めてばかりはいられません。だって、イエス様が来られるまでの間、イエス様を迎える準備が色々あるんですから。心は上に向けながら、目は前を向いて今日も歩くんですよ！

♪まもなくかなたの♪（PW48、イン107、ふ57他）

聖書 使徒1・12・14 テーマ 聖霊待望の祈り

序論

(高橋頼男)

復活の主の命令と約束に従って、弟子たちはエルサレムの二階座敷に集まり、共に、ひたすら、祈り待ち望んでいました。そこに約束の聖霊が注がれたのです。主の約束を信じて、彼らがみな心を合わせて、ひたすら祈りをしていくことに注目しましょう。

一、復活のイエスの命令と約束(4～5)

復活のイエスは弟子たちに向かって「全世界に出て行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えよ」(マルコ16・15)との宣教命令を与えられました。しかし、続く命令は、「エルサレムから離れないで、父の約束を待て」でした。世界に出て行く前に、なさねばならないことがあったのです。それは、彼ら自身が宣教のために整えられることでした。彼らが聖霊を求め、聖霊に満たされ、約束に従ってダイナミックな力を上から着せられるために、エルサレムに留まり、祈り待ち望むことでした。イエスの命令と約束は確かです。イエスの約束を信

じ、その命令に従うとき、必ず約束は実現するのです。主は、聖霊を求めることを命じなさいました。求めつづけ、捜しつづけ、たたきつづける者に、必ず約束の聖霊を与えることを繰り返し教えておられます。天の父は求めてくるものに、最も良き賜物、聖霊をくださらないことがあるうかと挑戦しておられます(ルカ11・9～13)。「酒に酔ってはいけません。むしろ御霊に満たされ」なさいとは(エペソ5・18)、主の至上命令です。自分の弱さを知り、み言葉を行う力がないことを認め、本氣になつて聖霊を求めるものでありましょう。

二、エルサレムのアパルムに集まる(13)

昇天の主を見送った彼らは、そのままエルサレムに帰り、ただちに泊まっていた家の屋上に上がりました。彼らの心の中には、主の命令が明確に意識されていました。それは、「エルサレムから離れないで、かねてわたしから聞いていた父の約束を待っているがよい」(4)です。「エルサレム」は、弟子たちにとって一刻も早く離れたい場所であったかもしれませんが。この都に同居する敵たちが、弟子たちを狙い、襲ってくる可能性があります。た。このエルサレムで、主は十字架にかかれ、弟子た

ちはみな主を捨てて逃げてしまったのです。このような場所に留まることは、恐れと、自分たちの弱さと不信仰に向き合い、正直に自分を見つめることを意味しました。

《彼らは：屋上の間にあがった》は、彼らが一つの決意をもってアパルム（屋上の間）に集まったことを感じさせます。彼らは、主のお言葉に従い、明確な決意をもって、祈ることのために集まった集団でした。ただ、ひたすら、「間もなく」（1・5）という約束に従って、聖霊を受けるために集まったのです。それこそが、自分たちを姿がわりさせ、主の偉大な宣教命令にかなう者とされる唯一の望みであったのです。

三、「共に」、「ひたすら」な祈り（14）

決意をもってアパルムに集まった人々は、雑多な人々でした。十一弟子たち、主に従ってきた女たち、母マリヤと、主の復活の後、主を信じる者となった主の兄弟たちでした。その他、総勢120人もの人々が集まったのです。この人々は、お互いに一つに集まり、共に祈ることの難しい人々であったかもしれせん。十一弟子たちは、最後まで誰が一番偉いかと争っていた者たちでした。最初から主に従ってきた弟子と、イエスに批判的

であって、後に加わったイエスの身内の兄弟たちとの関係はどうだったでしょうか。しかし、彼らは主のことばに従い、共に集まったのです。そして、ひたすら祈りました。どういう状態であっても、とにかく、祈るところに主は働いてくださるのです。ペンテコステは、個人個人の祈りではなく、このような雑多な人々が、共に集まる祈りの中で起こりました。その後も教会が一緒に祈っている中で、ペンテコステの恵みが注がれています。個人の祈りと共に、教会の祈りこそ聖霊が注がれる祈りであることがわかります。教会全体で、祈禱会で、グループで、祈るために集まり、共に、ひたすら祈りましょう。そして、「ひとりびとりの上に」「一同は聖霊に満たされ」（2・3～4）ることを求めていきましょう。

結論

復活のイエスのご命令に従い、教会の中のような人たちが、共に祈るために、アパルムに集まりましょう。そして皆心を合わせ一つ心になって、ひたすら祈りましょう。これこそ聖霊に満たされ、聖霊による宣教のみわざが力強くなされるための神様の手段です。一同が聖霊に満たされ、み言葉を語り出すよう、祈り求めましょう。

研究資料

(金井由嗣)

14節の、弟子たちの祈りの姿に焦点を当てる。最初に、本書の著者ルカが祈りに特別の関心を抱いていたこと、また祈りと聖霊を常に関連づけていたことを考慮する必要がある。彼は共観福音書記者の中で唯一、主イエスが十二使徒の選任にあたって一晚中祈られたことを記し(ルカ6・12以下)、ユダに代わる十二使徒の補充の際にも選挙の前に祈りが捧げられたことを報告する(使徒1・24・26)。また弟子たちの祈りに聖霊の満たしに伴ったことは本日の個所の他、ペテロとヨハネの釈放時(4・31)、ステパノ(7・59)、異邦人への聖霊の満たしに先立つペテロの祈り(10・9)など繰り返し強調されている(クルマン)。

この個所の祈りは主イエスの命令(4・5節)と約束(8節)への応答である。「エルサレムから離れないで」「父の約束を待て」との主の命令通りに祈って待つ信仰の姿勢が、聖霊の満たしと地の果てまでの宣教につながったのである。

テキスト

12 それから彼らは この記事が時間的に主イエスの昇天と連続していることを示す。安息日に許されている距離 ミシユナーの規定では二千キュビト(1 km余り、ブルース)。弟子たちの生活感覚として、安息日規定が身につけていたことを教えてくれる記事である。後で出てくる神殿礼拝(2・46)や定時の祈り(3・1)の記事とあわせ、初期の弟子たちが律法に忠実なユダヤ人であったことを記録している(フィッツマイヤー)。

13 屋上の間 または「階上の間」。平らな屋根の上に建て増した部屋。伝統的に、最後の晩餐の部屋、及び復活の主が弟子たちに現れた部屋と同一視される。マルコの母親の家(12・12)であったとする伝承もある。エルサレム市内の拠点がいくつもあったわけではないだろうから、それらが同一の個所であった蓋然性^{がいぜんせい}はあるが、確かな根拠があるわけではない。この単語は開放的な「屋上」のみならず、簡単な壁と屋根を備えた「二階部屋」を指すこともある。そうであれば、主が現れた時弟子たちが「戸をみなしめて」(ヨハネ20・19)いた記事との矛盾は解消するが、ユダヤ人の追求を恐れた弟子たちが同

じ建物の一階に籠もっていたという読み方もできる。その人たちは：共に祈っていた人々のリスト。最初に十二使徒（ユダが欠けたので実際は十一人）の名前が挙げられる。ルカ6・14〜16と同じだが、一部の順序が違っている。マタイ10・2〜4、マルコ3・16〜18と比べると、「ヤコブの子ユダ」の名前が「タダイ」に入れ代わっている。同一人物の別名（一方は愛称）と見るべきだろう。

14 次に 婦人たちが挙げられる。イエスの母マリヤの名前が出てくるのは、新約聖書中この個所が最後である。マリヤの最期についてカトリックには様々な伝承があるが、聖書は沈黙している。最後に、イエスの兄弟たちが出て来る。彼らは主イエスの生前には彼をメシヤだと信じていなかった（ヨハネ7・3〜7）が、復活の後には弟子の交わりの中にいた。最大の理由は、復活された主がヤコブにご自身を現されたことである（1コリント15・7）。彼らの中、ヤコブとユダは新約聖書の中にその手紙を遺している。そのどちらにも、「主イエス・キリスト」への真剣で誠実な信仰が言い表されている。復活の出来事は、彼らの人生を決定的に変えたのである。

主語の 彼ら とは、十一使徒である。使徒たちが教会を代表するとの観念が現れていると見ることも可能である。心を合わせて〔ギ〕ホモシユマドン。新約聖書中に11回、そのうち10回が使徒行伝で使われている。邦訳聖書では様々な言葉に訳し分けられている。キリスト者の群が心を一つにして祈る場面の他、彼らを迫害するユダヤ人の集団行動にも用いられている。ある集団が一つとなって行動する様子を生き生きと描く、本書に特徴的な用語。ひたすら そのことに専念する、専心する、の意。主の約束された聖霊を受けるために、彼らがとった方法は唯一、祈ることであった。「間もなく」（5）との主の言葉は、具体的にいつまで待てばよいかを示していない。また、聖霊を受けるために人間の側でできることは何一つなかった。彼らはただ主の約束を信じ、主の命じられたとおりに「ひたすら」祈りつつ待ち続けた。それこそが、聖霊を受けるための最善の備えだったのである（久保）。

参考図書 O・クルマン『新約聖書における祈り』、『ビジュアル聖書百科』、F・F・ブルース『使徒行伝』、久保泰昭『使徒の働き』、中島彰『主の復活の証人として』。

聖書

使徒1・12〜14

タイトル

聖霊待望の祈り

暗唱聖句

彼らはみな、…心を合わせて、ひたすら祈をしていた。
使徒1・14

目標

聖霊の恵みを求めて、心を合わせて祈る。

導入

(水野晶子)

今年は、イエス様がよみがえられたイースターの礼拝を3月27日にささげました。その日から40日たった5月5日が昇天日、イエス様が弟子たちの見ている前で天に上げられ、雲に迎えられ、天に帰って行った日です。

イエス様はよみがえられてから、40日の間、たびたび弟子たちに現れて、弟子たちを励まし、大切なことを命じられました。また、すばらしい約束をしてくださいました。どんなことだったのでしょうか。

イエス様の命令と約束

天に帰られるイエス様は、弟子たちに、「全世界に出て行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えよ」(マルコ16・15)と命じられました。弟子たちも、十字架にかかって死んでしまったと思っていたイエス様が復活さ

れたのを見て、このすばらしい喜びのビッグニュースを伝えたいと思いました。しかし、弟子たちは弱いのです。敵を恐れていました。とても出ていく勇氣も信仰もありません。そんな弟子たちに、イエス様は、「見よ、わたしの父が約束されたものを、あなたがたに贈る。だから、上から力を授けられるまでは、あなたがたは都にとどまっていなさい。」(ルカ24・49)と命じられたのです。そこで、弟子たちはエルサレムの泊まっていた家の屋上に集まりました。

祈りに集まった人々

祈りに集まった人々は、イエス様の弟子たち11人と、イエス様の兄弟たちとイエス様のお母さんのマリヤさん。それに、いつもイエス様に従ってきた女の人たちでした。弟子たちはイエス様が十字架にかかれる寸前に、一番偉いのは誰かと言いつ争っていました。また、イエス様が一番苦しんで祈られたゲツセマネの園で、一緒に祈ってほしいと言われたのに、眠ってしまうような頼りない弟子たちでした。イエス様の兄弟も、はじめはイエス様の働きを批判していました。この人たちが集められ祈り始めたのです。

心合わせての祈り

イエス様は、彼らを一つにしてくださいました。祈っていくうちに、一人一人の心の内に働きかけてくださったのです。「神様、私は自分が一番偉いと言って威張っていました。ごめんなさい。」神様、私はイエス様を疑っていました。赦して下さい」と次々悔い改めて祈りました。また、集まっている人たちも、お互いの罪をお詫びし合って、皆の心がどんどん一つになって行きました。何よりも約束の聖霊を求めてひたすらに祈りました。上よりの力がいつ与えられるのか誰も知りません。毎日、来る日も来る日も信じて祈りました。

十日たち、五旬節の日、約束の聖霊が一緒に集まっている一人一人の上にとどまり、一同が聖霊に満たされたのです。弱虫だった弟子たちは力を受けて、大胆に恐れず、イエス様のことを証しし、全世界に福音を伝える人になりました。

例話

Iさんは、中学3年生です。3歳の時に少しかけお父さんとお母さんが別居しました。そのとき「自分が悪い子だったから別居したんだ」と思って心を痛めています。

た。教会学校で「イエス様は、私たちを宝物と見ていてくださる」というメッセージを聞いた時、それまで、いつも怒られたり、失敗すると「じぶんはだめだ」と考えていましたが、イエス様はどんな時でも愛してくださいっていて、十字架で私の罪の身代わりになってくださり、三日目によりがえられたことを信じて、小学校1年生で洗礼を受けました。小学校3年生の時、お友だちのAさんにイエス様のことを伝えて、教会に導き、今も一緒に礼拝し奉仕しています。Iさんはいつも神様に祈り、待ち望んで、聖霊によつてみ言葉を通して、力を受け、解決が与えられています。「あんな子じゃない」と言ったお父さんを恐れていましたが、聖霊は恐れを取り除いてくださいました。また、コロサイ1・25のお言葉から、伝道師になりたいと夢が与えられました。

私たちも、毎日聖霊を待ち望んで祈りましょう。聖霊に満たされて、主のみ言葉を伝えましょう。

♪おことばしんじ♪ (こ改93)

聖書 ルツ1・15〜18 テーマ 祝福された人

序論

(高橋頼男)

ルツ記は士師記の付録であり、サムエル記の緒言です。ダビデ家の起源を示すため、一つの意図をもって挿入された話です。ルツ記の主人公ルツは、モアブという異邦の女性でした。ユダヤから来てモアブに住み着いたナオミの子と結婚し、後に夫を失い、姑のナオミに仕えることを決意してイスラエルに来たのです。彼女は、ボアズとの再婚を通して、後に救い主の系図の中に組み込まれます。異邦人の女がイスラエルから出るメシヤの系図の中に入ること、真に興味深く驚くべきことです。

一、ルツの決断と信仰(15〜18)

故郷の飢饉が去って再び繁栄を取り戻したことを知ったナオミは、寄留の地モアブからベツレヘムに帰ることを決意しました。そして、死んだ息子たちの嫁をそれぞれの故郷に帰そうとします。オルパはナオミの意を受け入れて離れていきますが、ルツはあくまでも姑から離れず、異国の地にまで共に行くと言い張りました。ルツの決断と行動

は、姑ナオミに対する心からの愛と尊敬から出たものでした。夫に先立たれ、二人の息子を失った天涯孤独の姑ナオミに、生涯をかけて仕えていくことを選び取ったのです。当時女性が夫と息子を失い孫もいないということは、社会的な死を意味していました。それゆえナオミはまだ若いルツを説得してこの世の幸いを得るよう勧めました。しかし、ルツは姑と共にいることを選び、生涯をかけて姑に仕えることを切望したのです。彼女はこの世の幸福を超えたものを大切にしました。彼女は異邦の女性ですが、律法が命じる「あなたの父と母を敬え。これは、あなたの神、主が賜わる地で、あなたが長く生きるためである」(出エジプト20・12)という戒めを豊かに満たす生き方をしました。それで、彼女の行いと生活そのものが律法となっていたのです。「すなわち、律法を持たない異邦人が、自然のままでも、律法の命じる事を行うなら、たとい律法をもたなくても、彼らにとっては自分自身が律法なのである」(ローマ2・14)。また、かたより見ることはない神様にとつて、異邦人の彼女こそ真のユダヤ人であったのです。「外見上のユダヤ人がユダヤ人ではなく、…かえって、隠れたユダヤ人がユダヤ人」(ローマ2・28〜29)です。

しかしまた、ルツの決断と行動は、信仰から出たものでもありました。彼女はナオミを通してその神その民を、自分の神自分の民として選んだのです。ルツは親族や友人たちから離れ、同国人との再婚の望みを捨て、望みのない一人の老いた姑と共に、見ず知らずの異国に行く決心をしてぶれることがありませんでした。このルツの決断は、アブラハムの決心と似ています。国を出て、親族に別れ、父の家を離れ、行く先を知らずして旅立ったアブラハムのあの信仰です（創世記12・1）。

ルツはまた約束の地に宿る信仰を抱いていた信仰者の仲間です。「…実際、彼らが望んでいたのは、もつと良い、天にあるふるさとであった」（ヘブル11・15～16）。

ルツは姑ナオミと行動を共にすると決めました。そしてナオミの行くところにとこまでもついていくのです。それはクリスチャンが生涯をかけて愛する主にとこまでも従っていくことの模範でもあります。「彼らは…小羊の行く所へは、どこへでもついて行く」（黙示録14・4）。ルツは優れた信仰と徹底的な従順を持っていた人でした。

二、ルツの報い（4・18～22）

姑ナオミに従ってユダヤの地に來たルツは、懸命に姑に

仕えます。異国の地におけるその純粋な仕える姿は、周囲の人々にも好意をもって受けとめられ、図らずも誠実で信仰深いボアズとの出会いが備えられていました。

ボアズとの正式な結婚を通して、ルツはメシヤの家系につながる者となつて行きます。ボアズからルツを通してオベデが生まれ、オベデからエッサイが、エッサイからダビデが生まれます（マタイ1・5）。そして、このダビデの末から救い主が誕生するのです。ルツという一異邦人女性の一家族の中で現された信仰が、やがて民族を越え、世界の大きな救いにかかわっていくのです。だれがそのようなことを想像することができたでしょうか。士師記からサムエル記に向かうイスラエルの歴史は不信仰が蔓延する闇と混沌の時代でした。そのような時代にあつて、神と人に忠実に仕えたルツの信仰は、荒野の中のアアシスのようにきよく慰めに満ちた信仰の物語です。

結論

神を愛し、人を愛して生きたルツの真実できよい信仰と愛の生活にならない、主に従い神に祝福される生活と生涯を送る決意をいたしましょう。

研究資料

(金井由嗣)

文脈と思想

最初に、もし千代崎秀雄『虹色の落ち穂』を手に取ることができれば、冒頭部を一読して「ルツ記」とその登場人物についてのイメージをつかんでおかれることをお勧めする。本書が旧約正典に入れられたのは明らかにダビデ王との関係によるが、単にダビデの祖先についてのエピソードを記したというだけではない、豊かなメッセージが本書には込められている。

「ルツ記」は、苦難の人生を誠実に生き抜いた魅力的な女性たちの物語である。女性が男性に依存しなければ生きていけない社会、宗教に基づく民族共同体の狭さの下で、彼女たちは社会の規範に従いつつ、一對一の人間関係において誠実な愛情に基づいた行動をとり続けることでその社会の「狭さ」を乗り越えていく。「垣根を越える信仰」の豊かさを、彼女たちから学び取ることができる。

モアブ人であるルツが夫の存在なしにイスラエル社会に入っていくことは、ルツ自身にとっても、受け容れる

側の社会にとっても、決して容易なことではない（申命23・3）。しかしルツは、イスラエルの神「主」に対する真実な信仰と、姑のナオミに対する真実な愛によって人々の信頼を獲得し、更に亡夫の嗣業を残すという神の民の義務に忠実に行動することによって神の民としての資格を認められるに至った（2・11、12）。後にはダビデ王、そしてイエス・キリストの系図に名を連ねることになったのである。

一方の主人公であるナオミの人柄について触れておく。ルツは明らかにナオミと共にいることを強く願うが故にナオミの神「主」を受け容れたのであって、その逆ではない。苦難の中でも唯一の神に信頼して明るく生き抜くナオミの豊かな人間性が、この物語のそもそもの発端である。この見地からすれば1・20、21の彼女のことばは自分の人生を嘆く愚痴ではなく、苦しみの中でも自分を客観視できる心のゆとり（ユーモア）の表れとみなした方がよい（千代崎）。

背景

レビラト婚と親族による「あがない」 申命25・5以下に、子どもがいない夫婦の夫が死んだ場合、兄弟の一

人が結婚するようにとの規定がある。この場合、最初に生まれた子どもは法的には死んだ元夫の子として、その家名と土地を嗣ぐことになる(学界では「レビラート婚」と呼んでいる)。ルツ1・11は、この制度を前提として理解される。律法では兄弟についてしか書いていないが、エリメレク一家のように兄弟が皆死んでしまった場合、もつとも関係の近い親族に拡張して適用されていたようである。土地の「あがない」(買い戻し)についてはレビ25・25以下にその規定がある。この二つの規定を同時に履行した場合、ルツと結婚する者はナオミが管理するエリメレクの土地を買い戻した上で、ルツとの最初の子どもをエリメレクの相続者として買い戻した土地を継がせる義務を負うことになる。

テキスト

15 自分の民と自分の神々のもとへ帰っていきまし
古代において、民族と宗教は不可分の関係にあった。モアブの民族神ケモシユを中心とする多神教世界がオルパとルツの本来の世界であり、夫の死後もナオミに忠実を尽くした後で元の世界に帰って行ったオルパの行動は当時の基準では十分に賞賛に値するものであった。

16 あなたの民はわたしの民、あなたの神はわたしの神です 前記の理由から、ルツがナオミについてイスラエル社会に入ることは、ナオミの神「主」を自分の神とする「改宗」を意味した。自らの意思に基づくルツの決断は、当時にあつては極めて異例のことであつた。ルツはナオミの人格に強く惹かれると共に、ナオミの人生の基盤が「主」を畏れる信仰にあることを認めていたのである。

17 そのかたわらに葬られます 出身民族の神を捨てることは、本来の同族社会との決別を意味する。年齢からいってナオミが先に死ぬことは当然予想されるが、その後も身より一つないイスラエル社会で生涯を終えることをルツの決断は含んでいた。主よ、どうぞわたしをイスラエルの神「主」に向かつて誓うこと自体、ルツがすでに主を信じる信仰に生きていることを示している。すでに彼女はモアブ人の社会とその宗教に決別していたのである。

参考図書 千代崎秀雄『虹色の落ち穂』、レオン・モリス(ティンダル聖書注解)、K・D・サーケンフェルド(現代聖書注解)。

聖書

ルツ1・15〜18

タイトル

神に祝福された人ルツ（母の日）

暗唱聖句

あなたの民はわたしの民、あなたの神はわたしの神です。
ルツ1・16

目標

神を愛し、人を愛して、神に祝福される生涯を送る。

導入

（松浦みち子）

今日は「母の日」です。みなさんを生み、育ててくださっているお母さんに心から感謝を表しましょう。お母さん、ありがとう！ 今日のお話しは、義理のお母さんとお嫁さんの心温まる物語です。

ある一家の悲しいできごと

ある時イスラエルの国に、たいへんな飢饉ききんがありました。食べる物がなくなった時、二人の食べ盛りの男の子をかかえているお父さんが、「そうだ。となりの国に移住しよう！」と決心して、奥さんと二人の子供を連れてモアブという国にやってきました。お父さんの名前はエリメレク、奥さんの名前はナオミといました。二人の息子の名前は、マロンとキリオンといました。ところ

が思いがけない悲しいできごとがこの家庭を襲ったのです。一家の働き手のお父さんが死んでしまい、ナオミと二人の男の子が残されたのです。しかし、やがてふたりは立派な青年に成長し、それぞれ結婚しました。いったいどうしてこんなことが起るのでしょうか。またしても悲しいできごとが襲いかかり、二人の息子が次々と死んでしまったのです。今では、ナオミと息子たちのお嫁さん二人の三人だけが残されました。お嫁さんの一人はオルバ、もう一人はルツと言いました。

二人のお嫁さん

悲しみのどん底にいた時、年を取ったナオミは主がイスラエルを顧みてくださり飢饉から救い出してくださいましたことを耳にしました。そこで、出身地であるイスラエルの国に帰ろうと一大決心をして、お嫁さんたちに言いました。「わたしはねえ、ふるさとへ帰ろうと思うの。」すると二人のお嫁さんは声をそろえて「じゃあ、お母さん、私たちも一緒にしますわ。」と言いい、さっそく三人は荷物をまとめ、イスラエルに向って出発しました。しかし、ナオミは旅の途中で、ふと足を止め「あなた達にお話しがあるの。」と言いました。「お母さん、何でしょう？」ナオミ

5月

8日 礼拝メッセージ例

はお嫁さんたちにこう言いました。「今まで、息子やわたしに親切にしてくれてありがとう。あなたがたはまだ若いので、自分の家に帰りなさい。神様があなたがたを祝福し、幸せにしてくださいように。」「お母さん、何をおっしゃるのですか。私たちは一緒に行きます。」と二人は泣きながら答えました。しかし、ナオミは二人の将来を思いやって「お帰りなさい。もう、わたしにはあなたがたの夫になるような息子はいないのだからね。ふるさとのモアブに帰って幸せに暮らさない。」二人はまた声をあげて泣きました。なお続いてナオミが強く勧めるので、ひとりのお嫁さんオルパは、泣く泣くナオミにお別れを言ってモアブの国に帰っていきました。

ルツの決心

ところが、もうひとりのお嫁さんのルツは、ナオミにすぐりついて離れようとしません。「ほら、オルパは帰って行きましたよ。あなたもそうしなさい。」ナオミがそう言うと、ルツは答えました。「いいえ、お母さん。わたしにお母さんから離れて家に帰ることを勧めないでください。わたしはお母さんのふるさとと一緒にいて行きたいのです。お母さんがどこに行かれても、お母さんの

行かれる所にわたしも行き、お母さんと同じところに住みたいのです。お母さんのふるさとイスラエルの民は私の民、あなたの神はわたしの神です。」と、涙ながらに懇願します。ルツはナオミの息子と結婚し、ナオミと生活を共にするうちにナオミの信じるイスラエルの神様を信じるようになったのです。モアブの偶像を捨て、生涯、真の神に従って行こうというルツの信仰告白でもありました。さらにこうも言いました。「お母さんの死なれる所でわたしも死に、そのそばに葬られたいのです。もし死に別れでなく、わたしがお母さんと別れることがあれば、神さまどうぞわたしを罰してください」と。ルツは何とナオミを愛し敬っていたことでしょう。そして何と深く神様を信じていることでしょう。ルツにとっては、ナオミと離れることはその信仰を失うことでもあったのです。ナオミと行くこれからの未知の世界でどんなことが待ち受けているか知れない不安、夫と死別するというような試練を通してゆるぎない信仰をルツはナオミをとおして培っていたのです。ルツのひたむきな心、神様に従って行こうとする姿勢は、私たちの模範ですね。

♪ひとあしひとあし♪ (ふ32)

聖書 使徒2・1～11 テーマ ペンテコステの恵み

序論

(大頭真一)

ペンテコステは、聖霊が弟子たちの上に降^{くだ}った日である。聖霊に満たされることは、私たちにどのような変化をもたらすのだろうか。

一、聖別

聖霊に満たされた後の弟子たちの生活についてルカは記す。①いっさいの物を共有。資産や持ち物を売っては、必要に応じて分け合った(44～45)。②心を一つにして、礼拝と聖餐^{せいさん}と賛美の日々を過ごし、すべての人に好意を持たれていた(46～47)。これはかつて主イエスが教えられた二つのいましめの成就であった。それは「心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ」と「自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ」(マタイ22・37～39)。すなわち神と人へのまったき愛であり、これこそウェスレーが聖^{きよ}めの定義として好んで用いたものである。

まったき愛を現実に生き抜かれたのは主イエスご自身であった。だからまったき愛とは主イエスのように生きることである。けれども主イエスの生涯の果てには十字架の死があった。主のように生きるとは主のように死ぬことである。「進んで死なれた神にならう」ことがまったき愛であり、そのためには自分の命を神のために明け渡すしかない、現代のウェスレアンであるキンローは述べている(『キリストのように生きる』)。

私たちにとって、このことは厳しすぎるように思われる。だが主の命令は私たちを束縛するためではなく、解放するためであることを忘れてはならない。神を知らず暗やみの中に生きていた私たちの罪ゆえに、主は十字架にかかってくださった。それは、私たちが自己中心の生き方から抜け出すためであって、主は罪と妥協をなさらない。御霊に満たされるときに、私たちはキリストの思いと心に生きることができると。そして、暗やみを憎み、神と人へまったき愛を注ぎだすのだ。

二、宣教

「そして主は、救われる者を日々仲間に加えて下さった」

たのである」(47)は聖霊に満たされることのもうひとつの結果を示す。このみ言葉が前述の44～47節に続いているのは偶然ではない。宣教は聖さの実である。「聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて……わたしの証人となるであろう」とあるが、この力は人々をなぎ倒すような霊力といったものではないことに注意を要す。キリスト者の自分を投げ出す生き方を見て、このような人々はいったい何者だろうか、この世はいぶかしむのである。

宣教の動機もまた御霊によって与えられる。聖霊に満たされるときに救われない者は滅びるという真理が鮮やかになる。そのとき宣教は片手間ではできなくなり、私たちをとらえて離さない関心事となる。御霊は神の思いを教える。神が減んでしまったまじいに痛む、その痛みを知るときに、私たちは祈り宣べ伝えずにはおられなくなる。

宣教の能力もまた御霊によって与えられる。14節からのペテロの説教は旧約聖書を自在に用い、キリストの十字架と復活の福音を余すところなく語るものであった。その結果「その日、仲間に加わったものが三千人ほど」

(41) という大リバイバルが起こった。御霊は私たちにみ言葉を理解させ、語らせ、聞く者を揺り動かす。

ペテロたちが用いた「他国の言葉」は御霊の働きの本質を物語る。かつてバベルの塔を建てようとしたときに諸言語の間に壁ができた。御霊は今、その壁を越えてみ言葉を宣べ伝えさせた。人々はただ奇跡を見て信じたというのではない。そのとき人々は「心を刺され」て、「兄弟たちよ、わたしたちは、どうしたらよいのでしょうか」と救いを求めたのであった。

結論

すべてのキリスト者は聖霊に満たされて生きるようにと招かれている。それはキリスト者にとって選択可能なオプションではない。もし、私たちが聖霊の満たしを求めないならば、私たちの信仰はゆるやかな麻痺を始めるだろう。礼拝は形式的に、宣教はおざなりになり、この世への関心が神への愛にとつてかわるようになる。それは私たちにとって取りかえしのつかない損失である。そして、だれよりもそれを惜しまれるのは神である。

研究資料

(宮澤清志)

本日は聖霊降臨日（ペンテコステ）である。今週の目標は「聖霊に満たされ、造り変えられて生きる」である。私たちが新しく生まれ変わるのも、造りかえられるのも、聖霊によることである。その意味で、ペンテコステは、強調してもしすぎることはない日である。

テキスト

1 五旬節の日がきて この言葉は、大麦の収穫の初穂の束をささげてから50日目という意味である。すなわち過ぎ越しの祭の後の最初の日曜日から数えて50日目に祝われる祭りであることからこの名がある。また「きて」という言葉には、単なる日の流れという意味よりもむしろ、決定的な時の充滿によって起こる出来事が到来したという意味を含んでいる（ガラテヤ4・4参照）。すなわち聖霊降臨の約束（1・4・5、8）が成就されるまでの期間が満了し、預言の成就の日が来た、という決定的な出来事の到来を意味する。みんなの者 120名ばかり（1・15）のことと思われる。しかし、中にはいわゆる「使徒集団」という説もある。一緒に 原始教会の理想的な

一致団結ぶりを示す使徒行伝特有の言葉（1・15、2・44他）。この言葉は詩篇133・1にも現れており、使徒行伝以前には、この語は「集会」や「共同体」との関連において用いられている。

2・4 これらの節に記述されている、聖霊の降臨の外的なしるしが史実であったかどうかと問うことは、恐らく無意味であろう。激しい風も、炎の舌も、一つのしるしとしてとらえる考え方が一般的である。しかし、だからといってこの個所をただで片づけてしまうことは、この節の持っている真の意味を薄めかねない。つまり聖霊の満たしとは、結果として外面的な、目に見えるしるしが伴う、ということである。聖霊に満たされるとは、主観的な自らの内的経験であると同時に、客観的な他の人からもそのように見える経験として現される。なお、「風」「炎のような舌」「現れ」は、旧約では具象的な神顕現を表す。「風」とはその同義語である「霊」の降臨を表し、「舌」は「言葉」「異言」とその同義語である「言語」を表している。なお、この「炎」と「舌」は、主語を「炎」（単数）にするか「舌」（複数）にするかでその解釈が分かれている。

2 突然 驚くべき天来の超自然的な現象を印象づける語。続く「天から」の「音」という言葉と共に、この出来事が神の直接的働きの事件であることを描写している。

5～8 聖霊降臨の出来事に対する群衆の驚きが記される。4節までの出来事を聞いて、集まってきたのは、七週の祭りを祝うためにエルサレムに集まってきた信仰深いユダヤ人たちであった。「信仰深い」という言葉はユダヤ人に対してのみ用いられており（他にシメオンとアナニヤ、それにステパノを葬ったユダヤ人）、この奇跡は、彼らが証人となった事実を明確に記している。また、物音 については、激しい風が吹いてきたような音 か、もしくは 聖霊に満たされ、御霊が語らせるままに、いろいろの他国の言葉で語り出した 声か、はつきりしない。しかし、文脈から考えて、他国の言葉で話し出した声は有力ではないかと考えられる。それによって、自らの生まれ故郷の言葉を聞いた信仰深いユダヤ人たちの「驚き」「怪しみ」すなわちあつけに取られた様子をさらに際立たせている。驚き とは、心を奪われるほどの大きな驚きであり、我を失ったというほどの大きな

驚きを意味する。また 怪しんで とは、非常に広い意味範囲をもつ言葉であるが、いずれにしてもその奇跡に立ち会った人々の尋常ならざる驚きが記される。

9～11 この地名のリストについては、辞典などで調べて頂くことが望ましい。パルテヤ人、メジャ人、エラム人もおれば、メソポタミヤ とは、ユダヤの東方の地方の名称であり、カパドキヤ、ポントとアジア、フルギヤとパンフリヤ とは、ユダヤから見て北西にある、いわゆる小アジア地方にある都市の地名である。またこれらの地方から見て南西側にある都市が エジプトとクレネに近いリビヤ地方 であり、そこから遠く離れて西側にある地方が ローマ である。このローマだけが唯一ヨーロッパ本土の地名であることは興味深い。また、人種からいえば、ユダヤ人と改宗者 とあるように、天下のあらゆる国々から 来ていた人々であった。なお、改宗者 とは、異邦人でありながらユダヤ教に改宗した人々のことである。

参考図書 榊原康夫『使徒の働き 上巻』（いのちのことば社）、F・F・ブルース『使徒行伝』（聖書図書刊行会）他。

聖書

使徒2・1～11

タイトル
暗唱聖句

聖霊に満たされよう！
一同は聖霊に満たされ、御霊が語らせる
ままに、いろいろの他国の言葉で語り出
した。
使徒2・4

目 標

聖霊に満たされ、造り変えられて生きる。

導入

(飯田勝彦)

教会には、三つの大きな祝いがあります。一つは、イエス様の誕生をお祝いするクリスマス。二つ目は、イエス様が死からよみがえられたイースター。そして、三つ目はイエス様の約束された聖霊が降ったペンテコステです。今日は、ペンテコステの礼拝です。これは私たちにとってはとても大きな恵みです。

約束の聖霊に満たされた

イエス様は天に上げられる前、弟子たちに約束されたものがありました。何でしたか？ そう、聖霊です。その聖霊を弟子たちはどこで、何をしながら待ったのでしょうか？ エルサレムで多くの人たちと心を合わせて熱心に祈りながら待ったのです。皆さんは、弟子たちのよう

に祈ることができましたか？

イエス様は、聖霊がいつ降るかについてお話になりました。でも、弟子たちは聖霊が与えられるまで必死に祈りつづけたのです。すると、イエス様が天に上げられて10日後（ペンテコステの日）に不思議なことが起こりました。皆が祈っていると突然、「ゴォー！」っと激しい風が吹いてくるような音が天から聞こえ、その音が家中に響きました。さらに、舌のようなものが、炎のように分かれて現れ、一人一人の上にとどまったのです。すると皆が、聖霊に満たされました。イエス様の約束されたとおりになったのです。

聖霊によって変えられた

イエス様は、弟子たちに、聖霊が降るとどうなるかと言われていましたか？ イエス様の言葉にもう一度耳を傾けてみましょう。「ただ、聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまで、わたしの証人となるであらう」。そう、力が与えられ、イエス様を多くの人たちに伝えて行く人になると言われたのです。力を受けるとは、何か急に筋肉がムキムキになって力持ちになること

ではありません。イエス様のことを多くの人たちに伝えることができる力なのです。

弟子たちの心は、聖霊に満たされるまで恐れや疑いで満ちていました。でも、聖霊に満たされてからは180度かえられたのです。

弟子のペテロもその一人でした。ペテロは、イエス様を裏切りました。でも、そのような弱さをもった人にも聖霊は注がれたのです。聖霊は強い人や努力する人、頭の良い人だけに注がれるものではありません。イエス様を信じ、聖霊を祈り求める人には、誰にでも注いで頂けるのです。聖霊に満たされたペテロは、力が与えられ人を恐れないでイエス様を伝える人に変えられました。他の弟子たちも、各地に遣わされて行きました。

例話

昔、イギリスにウィリアム・ケアリーという人がいました。彼は、小さな村の貧しい靴屋の子どもでした。そんな中でも彼は両親と共に教会に通っていました。16才の時、靴屋の見習いのために故郷を離れます。職場の友人に誘われて教会の集会に出ました。彼は、そこで聞いたメッセージに感動して、信仰の目が開かれたのです。

彼の心の中に、イエス様を伝えたい思いが与えられ仕事をしながら準備をしていました。そして25才の時に牧師となりました。ある朝、世界地図を見ながら祈っている時、聖霊に導かれて「私を遣わして下さい」と祈りました。やがて彼は、イエス様を伝えるためにインドに遣わされました。生活習慣、食べ物や気候が全く違うインドでの生活は大変でした。でも、祈りと涙の伝道の中で、イエス様を信じ救われる人たちがたくさん起こされました。インドに来て数年経った時、奥さんや息子が天に召されて行きます。ケアリーにとっては大きな悲しみでした。しかし、聖霊に満たされていたケアリーは、あきらめることなく力強く、イエス様を伝えて行つたのです。

(立石靖夫著『リバイバル人物伝』)

まとめ

聖霊には力と恵みがあります。皆さんは、この聖霊に満たされたいと思いますか？ イエス様は、皆さんに聖霊を注ぎたいと願っておられます。聖霊に満たされ造り変えられて、多くの人にイエス様を伝える人にされましょう。

♪風がやってきた♪ (ホ70)

聖書 使徒3・1～10 テーマ キリストの名による歩み

序論

(石田高保)

私たちは生きている限り、自分のためだけでなく、誰かのために役に立ちたいと思います。クリスチャンは、イエス様によってその人を生かす力が与えられているので、生きる希望と力をお分ちすることができま

一、神は希望を与えようとしておられる

〈生れながら足のきかない男が、かかえられてきた〉、4・22では40歳あまりの人とあります。何十年も物乞いをして暮らしてきました。この個所を見る限り、彼の唯一の望みは、その日食べていけるだけのお金をもらうことだけだったようです。この後すぐに、自分が歩けるようになることなどは、全く思いつきもしなかったでしょう。目に見える世界がすべてでした。私たちの中にも、この男性のように将来を自分で見限っている人はいないでしょうか。未来には希望が抱けず、不安や諦めが横たわっていることはないでしょうか。あるいはそういう人が身近にいないでしょうか。しかし将来を小さく見積

もらないようにと願います。神は私たちの生活と生涯に丁寧に関わっていて下さり、たとえ困難な出来事に出会っても、そのことを越えて新しい事をなして下さるからです。

〈ペテロとヨハネとは彼をじつと見て〉、彼らは人生を諦め、希望を失ったこの男性を見たとき、内側から憐みの心と、イエス様なら何かをしてくださるという信仰が湧き上がりました。彼らはしゃがんで、この男の人と目を合わせました。苦しんでいる人を上から見下ろすのではなく、自分たちも同じ立場に身を置いて、彼の目線に立ちました。このことは私たちが身の周りの人とのように接すればよいかを教えられます。自分に悩みを打ち明けてくる人に対して、私たちは自分の経験したことであるかどうかに関わらず、共感できるように祈りたい。それはすぐにアドバイスするのではなく、まずはその人の心の痛みを受け止められるように祈ることです。ただひたすら耳を傾けるためには、自分の思いを十字架に付ける必要もあるでしょう。

この男性は、ペテロとヨハネとが「わたしたちを見なさい」と、自分に声をかけて来たので、よっぽどたくさ

んのお金を施してくれるのではないかと期待しました。しかし「金銀はわたしには無い」という言葉にがっかりしたでしょう。ところがペテロはこの男性にとつて、お金よりはるかに大切なもの、彼の問題を根本的に解決するもっと良いものを提供しようとしていました。それは彼がイエス様を信じて、生きる希望を持つことであり、さらに彼が歩けるようになって、自分で生計を立てられるようになる道です。私たちは身の周りの人の当座の問題が解決されることを主に助け求めると共に、その人の魂が救われるという根本的な解決を求めていると思います。

二、神は人をおして働かれる

「しかし、わたしにあるものをあげよう。ナザレ人イエス・キリストの名によつて歩きなさい」、この言葉を聞いたとき、イエス様ならこの自分を救ってくださる、いやしてくださるに違いないという信仰が働きました。これについてペテロは解説して、「わたしたちが自分の力や信心で、あの人を歩かせたかのように、なぜ見つめているのか」と、自分の力ではないとはっきり言い切っています。「イエスの名が、それを信じる信仰のゆえに、あ

なたがたのいま見て知っているこの人を、強くしたのであり、イエスによる信仰が、彼をあなたがた一同の前で、このとおり完全にいやしたのである」。(3・12、3・16)

「イエス・キリストの名」とは、復活して生きておられるイエス様の力という意味です。私たちもお祈りをした最後に「イエス・キリストの名」によつて祈りますが、それは、今ここにおられるイエス様により頼んで祈るという意味です。「ふたりまたは三人が、わたしの名によつて集まっている所には、わたしもその中にいるのである」(マタイ18・20)、イエス様の名前には力があります。私たちも、これほどの力があることを信じて、イエス様の名前で祈りましょう。人に対しても声を出して祈ってあげましょう。事実、この出来事のように、生まれながら40年間、歩くことのできなかつた人が、リハビリもしないで、飛び跳ねるまでに瞬間的に癒されたのですから。

結論

あなたも、「わたしにあるものをあげ」ることが出来ます。それは「わたしの内に生きておられるイエス様の力」です。私たちはこれを周りの人に差し出すことができます。

研究資料

(宮澤清志)

テキスト

1 午後三時の祈のとき 夕べのささげものの時（出エジプト29・39以下）に続いて行われる祈りのとき。ユダヤ教では一日に3度祈りの時が定められている。使徒たちは、ペンテコステの後も律法を守り、ユダヤ人と同じように神殿での礼拝や祈りの時に集っていた。

2 生れながら足のきかない男 「生まれながら」直訳では「母の胎から」。この男の素性については知られていないが、「四十歳あまりの人であった」（4・22）といわれている。かかえられてきた とは、新改訳では「運ばれて来た」であり、成人してからかかえられてきたとしても20年あまりの歳月を運ばれ続けられてきたのであろうか。少なくとも、この男はここで体の癒しを望んでいる。

3 5 ここにおいては「見ること」に注目して黙想したい。

3 見て 見る、認める、気づく、といった、ごく普通の「見る」という言葉。

4 じつと見て バウアーは「緊張して何かに、あるいは誰かに視線を向けて見ること」と説明する。使徒行伝の別の個所では「にらみつけて」（13・9）と訳している。奇跡物語でよく用いられる言葉であり、ペテロの権能が宿った、力のこもった視線であった。

5 注目して 見つめて（新共同訳）、目を注いだ（新改訳）。しっかりと捉える、自分の力の中に保持する、というニュアンスを持つ言葉。何らかの精神的な働きに心を向けるという意味を持つ。

このように3〜5節には、それぞれ異なった「見る」という言葉が用いられており、それらの相違による登場人物の心の動きを思いめぐらすだけでもこの個所の黙想が豊かにされる。

6 金銀はわたしには無い ただ単に持ち合わせがなかったということもあるかもしれないが、2・44以下の、いわゆる私有財産の放棄ということも併せて理解することもできる。そして、その後にくこの物語全体のピークへの序論ということもできる。イエス・キリストの名によって、歩きなさい この個所は、この物語全体の重要点である。後のペテロの説教の中で、ペテロは幾

度となく「名」という言葉を用いてこのしるしの本質を語っている(3・16、4・10、12)。ここでは、イエスの「名」とは、ただの記号ではなく、人を強くし、また救いうるところの「実態」である。まさに「イエス・キリスト」の実在そのものであるということができる。特にルカは「イエスの名」による奇跡を強調する。この名に救いがあるのである(使徒4・12)。キリストの名を呼ぶこと、その名を唱えることが意味を持つのである。この名に基づいて神が働かれるのである。使徒行伝は、この名に基づいて神が働かれた歴史である(3・6、4・7、10、12、30、10・43、19・13)。

7・8 ペテロは、ただ前節のように命じてそれっきりでなかった。彼は、自ら手を伸ばして彼の右の手を取って立ち上がらせたのである。ここは重要である。私たちは、み言葉を語りっぱなしであってはならない。み言葉を語ったならば、今度はそのみ言葉が成就するように行動しなければならないのである。もしペテロが彼の手を取って起こすことをしなかったらばどうであつたらうかと考えることも、説教を豊かにする秘訣である。しかし、ここで彼の体を立ち上がらせたのは、紛れもな

くイエス・キリストの「名」であることを忘れてはならない。

8 躍りあがって立ち、歩き出した 躍り上がるとは、雄鹿のように飛び跳ねる様子を描き出しており、イザヤ35・6の預言の成就を示唆している。

そして、**神をさんびしながら、彼らと共に宮にはいつて行った** 物乞いをしていた男が祈る者とされたのである。この男の奇跡のクライマックスがここにおいて起こるのである。障がいを負っていた彼に対して閉ざされていた神殿に入るのである(レビ21・18・20)。癒された後、彼はもとの生活へと戻っていったのではなく、その生命が新しくされ、新たな生涯、祈りと賛美の生活が開かれたのである。イエスの「名」とは、ただ単に癒されたというにとどまらず、救いと新しい生命へと人々を招き入れる「名」なのである。

10 驚き怪しんだ 新共同訳では「我を忘れるほど驚いた」とあり、驚きの度合いがうかがえる。

参考図書 加藤常昭編訳「説教黙想集成3 書簡」(教文館)他。

聖書

使徒3・1〜10

タイトル

イエス様からパワーをもらおう！

暗唱聖句

ナザレ人イエス・キリストの名によって
歩きなさい。 使徒3・6

目標

キリストによって力強くされる。

導入

(飯田勝彦)

私たちは、いろいろな力に支えられて生活しています。例えばどんな力で支えられていますか？ 電力、風力、火力などたくさんあります。特に電力には、大変お世話になっていますね。電力がないと、電車にも乗れません。パソコンやゲームもできません。オール電化の家では、電力がなければ生活が出来ません。

先週は、ペンテコステ礼拝でした。臆病であった弟子たちが変えられました。それは聖霊の力によるものでした。聖霊の力に満たされた弟子たちは、変えられてイエス様を証する人とされました。

今日は、一人の男性がある力によって変えられたお話しです。

絶望の中にいる男

ここに登場する男性は、生まれたときから足が悪く、一人では歩くことが出来ませんでした。この男性は四十歳位の人でした。ということは、彼は約四十年間、歩けないで不自由な生活をしていたのです。働くこともできないので、神殿に来る人たちから施しを受けていました。もちろん、自分の足では神殿に行くことはできません。他の人に運んでもらって神殿に置かれていました。

もし、皆さんがこの男性と同じ立場だったらどんな気持ちでしょうか。おそらく、男性は自分の人生に希望を見いだせず、絶望の中にいたでしょう。また、人に迷惑を掛けている自分を責め、人生をあきらめていたのではないのでしょうか。

人生をあきらめ、希望がない生活は、どんなに辛いことでしょうか。そのような人生を過ごしている人が、今増えています。

力を与えられた男

男性がいつものように神殿でものごいをしていると、そこにペテロとヨハネが祈るためにやってきました。多くの人が男性を見て見ぬ振りをして通り過ぎる中、ペテ

口たちは違いました。彼らは、男性をじっと見つめたのです。何かもらえると男性は期待しました。ペテロは「私にはお金はない。でも、私のもっているものをあげよう。ナザレ人イエス・キリストの名によって歩きなさい」と言ったのです。それだけでなく、ペテロが男性の手を取って起こしました。すると、足と、くるぶしが強くなり、四十年も歩くことすらできなかった男性が、何と踊りあがって立ち、歩き出したのです。そして、全身で神様を賛美したのです。それはペテロを通して、イエス・キリストの力がこの男性に働いたからです。

ペテロはイエス・キリストが救い主であることをしっかりと信じていました。イエス・キリストの力は、イエス様を救い主と信じる人に、そして信じる人を通して働くのです。

例話

もう天に召されましたが、田原米子さんというクリスチャンがいました。彼女は、十六歳の時にお母さんを突然亡くしてから、本当の生きる意味を求めて悩んでいました。でも、その答えが見つからず、早くお母さんの所へ行きたいと思い、ある日、線路に身を投げました。幸

い、命は助かりましたが、身体に大きな障がいが残ってしまったのです。米子さんは、絶望の中で入院生活をしていました。そんな中で、毎週、宣教師と一人のクリスチャン青年が訪ねて来るようになりました。最初米子さんは、話しさえ聞くことが出来ませんでした。イエス様の十字架の愛に触れたのです。そしてイエス様によって救われ、心が変わられたのです。

その後、米子さんは、障がいを持ちながらも、救われた喜びを多くの人々に伝えました。絶望の中にいた米子さんを自由にしたのは、イエス・キリストの力にあったのです。

まとめ

私たちが生きていくためには、多くの力が必要ですが、何よりもイエス・キリストの力が必要です。イエス様から力を受けている人は罪から自由にされ、困難はありませんが、いつも喜びたえず祈り、すべての事に感謝する素晴らしい人生があたえられます。

皆さんは、もうイエス様から力を頂いていますか？

♪友よあすかがやこう♪（ホ67）

聖書 使徒5・1～11 テーマ 悔るべきではない神

序論

(石田高保)

聖霊降臨を経て新しくされた信じた者の群れは、心も思いも一つにしましたが、経済的な面においても、それぞれの持ち物を共有するような驚くべき一致を見ようになりました。これは全く上からの恵みに応答し、それぞれが自発的にしたことです。たとえ群れの相互扶助や宣教のために自分の財産を処分しなくても、他のメンバーから責められる性質のものではありません。まったくの自由意思で、自由な金額ですることでしたが、偽りの心で金銭を提供するメンバーも出てきました。それが、このアナニヤとサツピラという夫婦です。

一、神を欺く行為

彼らは所有していた土地を売却し、群れの必要のために提供しようとしていました。それ自体はほめられるべきことですが、過ちを犯していました。それは売却代金の一部を自分の懐ふところに取っておきながら、残りのお金を差し出して、「これが売却代金の全額です」と偽ったことです。

ペテロからすぐに見抜かれて「あなたは、自分の心をサタンに奪われて、聖霊を欺き」と言われ、さらに「あなたは人を欺いたのではなく、神を欺いたのだ」とまで言い当てられています。

聖書によれば献ささげものや施しは、「惜しむ心からでなく、また、しいられてでもなく、自ら心で決めたとおりにすべき」(Ⅱコリント9・7)性質のものです。つまり神様は、与えようとする人の動機に関心を持っておられることになります。彼らの場合は「惜しむ心」がせつかくの善行を汚れたものにしてしまいました。たとえ良い行いであっても、いやいやながらとか、罪悪感を味わいたくないからとか、見返りを期待する動機なら、それは、「神への香ばしいいけにえ」とはなり得ないでしょう。

恐るべきことに、ペテロの譴責けんさくの言葉が終るやいなや、アナニヤはその場で倒れて息が絶えてしまいました。妻のサツピラも夫と口裏を合わせて偽り通したため寸分たがわず同じ目にあっています。

二、神を畏れる心

二度も同じことが起きたということは偶然ではなく、罪に対する神のさばきがただちに下ったということでは

す。彼らはうっかりしていたのではなく、共謀してごまかした確信犯です。当然、悔い改めるようにとの聖霊の促しも受けたはずです。それにもかかわらず自分たちの意思を押し通したのです。彼らは「心を合わせて主の御霊を試み」たと断罪されています。初代教会の聖霊の著しいお働きの中で、共同体の倫理的な秩序を保つため、神に打たれるような事態が起こったのでしょう。しかしこの時代でさえこのようなことが頻繁に起こったとも思えません。またこういうことが現代の教会にも起こりうることも断言できませんが、神が心の内をすべてご覧になることを見て、神を畏れるべきことを教えられます。「神の慈愛と峻しゅん厳げんを見」(ローマ11・22)る思いがします。共同体に走ったこの思いがけない痛みを彼らは教訓としたことでしよう。

しかしこの辺りの適用は慎重を要します。私たちの罪に対する神のさばきはキリストの十字架において完了しており、悔い改めるなら即刻ゆるされるので、さばかれることはありません。「こういうわけで、今やキリスト・イエスにある者は罪に定められることがない」(ローマ8・1)からです。しかし罪を自覚しながらも、それを

楽しんでいたり、手放さなかったりしていつまでも悔い改めないでいるならば、何らかの形でさばかれることがあるかもしれません。神は途方もなく寛容な方であると高をくぐることは賢明ではないでしょう。なぜなら「まちがってはいけない、神は侮られるようなかたではない」(ガラテヤ6・7)からです。しかし神は私たちをできる限り痛い目にはあわせたくない、そこで少しでも早く、自発的に悔い改めることを願っておられるのです。

結論

アナニヤとサツピラのように、私たちも罪を犯したら即座にさばかれるわけではないですが、神が私たちの思いと言葉と行いとを全部見ておられるという畏れは持つべきでしょう。人に言えないような罪を行っていたら、ただちにそれを悔い改めて赦していただきます。自分ひとりでは手に余る場合には他のクリスチャンに立ち会ってもらって悔い改め、その人に赦しを宣言してもらい、定期的に関わってもらおうとよいでしょう。「互に罪を告白し合い」(ヤコブ5・16)とあるように、説明責任を負い合う関係を持つっていると誘惑により強く立ち向かえるようになるからです。

研究資料

(宮澤清志)

ペンテコステ以来、教会は目に見えて成長していった。歩けない人を歩かせ、大胆に神の言葉を語っていった。その人数も120名(1・15)から三千人(2・41)になり、そしてこの物語の直前には五千人ほど(4・4)になっていた。しかし、このような時こそサタンの働く機会となる。サタンは巧妙に教会の内部からその魔の手を伸ばしていた。

テキスト

1〜2 共謀きぼうして この両者の罪深い要素の一端がここに垣間見える。いわゆる「出来心」ではなく、共謀して という事実である(新改訳や新共同訳は「妻も承知のうえで」となっており、受けるニュアンスが若干弱い)。あらかじめ両者は打ち合わせたうえで、という意味が含まれる。

1 アナニヤ 「主は恵み深い」という意味の名である。当時のユダヤではありふれた名であったようである。サツピラ 「美しい」という名。

2 ごまかし 新改訳は「残す」であり、着服するとい

う意味が含まれている。なお、七十人訳聖書では、この語はヨシユア7・1のアカンに対して用いられている。

3 ここでペテロがアナニヤに対して問うていることは、①なぜ地所の代金をごまかしたのか、②なぜその心をサタンに奪われたのかの2つである。そのことが分離されて問われているのでなく、一つのこととして問われている。自分の心をサタンに奪われ 直訳は「サタンがおまえの心を満たし」となる。サタン とは、新約聖書においては、別名「試みる者」(マタイ4・3、Iテサ3・5)、「訴える者」(黙示12・10)とも呼ばれているように、人間の外側から人間の「心」(人格の中心)に働きかけ、そしてついにはこれを「支配する」実在的な力(シュラッター)。ルカは、このアナニヤとサツピラのほかに、イスカリオテのユダにもこのサタンがはいつたとしている(ルカ22・3)。聖霊を欺き 彼らの罪の最大の源は、この「聖霊を欺いた」ことにあった。サツピラにも同様の趣旨の叱責をしている(5・9「主の御霊を試みる」)。原始教会において、聖霊を欺き、試みる罪はもつとも重大であり、この世でも、また来るべき世においても赦ゆるされることはないと言われていた(マタイ12・31〜32)。

4 4・36、37のバルナバの行為同様、アナニヤとサツピラは兩人とも自ら進んで地所を売り、その代金をささげた。しかし、それは彼らの自由な自発的行為であり、問題は教会の交わり（助け合い）と個人の自由意志の兩者の間にある態度の問題であろうと考えるべきである。どうして、こんなことをする気になったのか 直訳は「なぜこんなたくらみがあなたの中の心に置かれたのか」となる。アナニヤは人間に対する悪巧みであったつもりであろうが、それらは結局のところ、聖霊なる神に対する悪巧みなのである。それは、代金をささげる行為と決断とは聖霊によってなされたものだからである。

5 5・6 アナニヤの死は、単なるショック死ではなく、またペテロの処罰でもなく、ペテロ（使徒）を通して語られた聖霊なる神による裁きである。それは、たとえばある写本では「倒れて」の前に「たちまち」を挿入していることから理解できる。人間の心のうちをすべて見通すことのできる聖霊なる神のご臨在のもとに生きるということとは、これほどまでに緊張感にあふれたものであるということ、私たちは忘れてはならない。それゆえこのことを伝え聞いた人々も、その圧倒的な臨在に非常

なおそれを感じるのである。息が絶えた 神の裁きによる死であることを強調する。なお、聖書の中で、この言葉によって死を迎えた人物は、アナニヤとサツピラのほかにシセラ（士師4・21）とヘロデ（12・23）だけである。

7 7・8 三時間ばかりたってから 集会が長時間であることを示しているが、この3時間の間に教会ではどのようなことがなされていたのかを思いめぐらすこともまた意味がある。彼女にむかって言った この言葉の取り方によって、2つの理解がなされる。まず、この言葉を翻訳の通りに理解すると、ペテロはサツピラに対して悔い改めの機会を提供していると考えることができる。しかし、「言った」を直訳すると「答えた」であり、この箇所においては問いのない答えとなる。するとここではサツピラに対して真実を告白する最後のチャンスを与える意図は無いと考える立場もある。

11 教会 使徒行伝の中で、この言葉が用いられるのはここが最初である。

参考図書 日本基督教団出版局編「説教者のための聖書講解 使徒行伝」（日本基督教団出版局）他。

聖書

使徒5・1～11

タイトル

神様を畏れて生活しよう。

教会全体ならびにこれを伝え聞いた人たちは、みな非常なおそれを感じた。

使徒5・11

目標

神を畏れ、真実な生活をする。

導入

(飯田勝彦)

皆さんは、家が停電になったことがありますか。

雷などの影響でしばらくの間、停電になることがあります。真つ暗な中、ロウソクや懐中電灯でその場を過ごします。でも、停電が2～3日続いたらどうでしょう。アメリカである時、大規模な停電がありました。賑やかな街が突然、真つ暗になったのです。しかもそれがしばらく続き、大変なことが起こりました。多くの人たちがスーパーなどに入り商品を略奪し始めたのです。暗くて誰も見ていないと思うと、自分の欲望を丸出しにしようという時があります。もし、皆さんならどうでしょう。アナニヤとサツピラの心は暗闇で覆われていました。

神様に喜ばれない生活

聖霊を受けた弟子たちによって、次々と救われる人々が起こっていました。一度に数千人の者たちが救われたのです。聖霊の働きとそのパワーは素晴らしいですね。聖霊によって教会は祝福されましたが、逆に悲しいことも起こりました。

信徒の中にアナニヤとサツピラという夫婦がいました。当時、喜んで神様にささげるため、多くの人たちが自分の財産を喜んで教会にもって来ていました。アナニヤたちも土地を売ったお金を携えてきたのです。もし、皆さんがお母さんから献金のために五百円もらったとします。でも、二百円を献金して、残りの三百円でお菓子を買ったとしたら、これは献金をごまかしたことになりますね。アナニヤは、土地を売った代金をごまかしたのです。アナニヤがしたことは、人をごまかしただけです。アナニヤは神様をごまかしたことになったのです。アナニヤは神様に嘘をつき、自分勝手な行動をしてしまったのです。それは、自分の欲のためでした。しかし、アナニヤたちのことを神様はご存じでした。それは、神様は人が見ることでない心を見ることがおできになるからで

す。アナニヤは、神様をあざむいたため神様に打たれて死にました。そのあとにサツピラも夫と同じように代金をごまかしたために、死んでしまったのです。

私たちの心の中が罪に支配され、真つ暗であつたなら、誰にも見られていなかったり、知られていなかったりすると、おそろしいことをしてしまうことがあります。自己中心や嘘、ごまかしなどに染まった生活は、神様に喜ばれるものではありません。

神様が喜ばれる生活

アナニヤとサツピラの出来事は、教会やそれ以外にも多くの人の耳に入りました。そして、それを聞いた人たちは恐れしました。アナニヤやサツピラの出来事を通して、教会や多くの人たちは、神様は、神様をあざむく者をそのままにはおかれないことを知ったのです。

私たちの心の中には、アナニヤやサツピラのようにごまかしや自己中心などの罪、汚れがないでしょうか。誰にも分からないと思つていても、神様はご存知です。

もし、罪をそのままにしておくなら神様は悲しまれます。それは、罪があるなら神様と愛し合うことが出来ないか

からです。そればかりか、罪のある心は私たちの生活も苦しくしてしまうのです。

皆さんは、神様に喜んで頂き、自分自身も幸せな生活をしたいと願うでしょう。もし、罪を犯すことがあつたとしたら、それを隠さないで素直に神様に告白し悔い改めることです。神様は、イエス様の十字架の血潮でそれを赦^{ゆる}してください。

私たちが神様を愛し、神様を畏れることを一番喜ばれるのは、神様です。畏れとは、恐れではありません。神様のことをいつも第一に考え、神様の喜ばれることに心を向ける人が、神様を畏れる人です。神様を畏れる人は、祝福されます。

まとめ

聖い神様を畏れ、神様の前にいつも素直に生きる者にされましょう。聖霊はそのためにも力を与えてくださいます。

♪おまもりください主よ♪ (ホ100)

聖書 使徒7・54〜60 テーマ 天を見上げる生涯

序論

(石田高保)

ステパノはキリスト教宣伝の罪で捕まり、最高裁判所で裁判を受けることになり、聖書の専門家を向こうに回し、聖書に基づいてアブラハムからキリストまで二千年間の歴史をとうとうと語りました。不思議なのはこの被告人の大演説を誰も途中で遮らなかつたことです。実はステパノに力強く臨んだ聖霊のお働きで、反対者がぐうの音も出なくなつていたのです。最後には裁判官と被告人の立場が逆転し、居並ぶ国会議員たちが神の言葉によつて裁かれています。

追い詰められた彼らは、激しく怒つて歯ぎしりをし、大声で叫びながらステパノを石で撃ち殺そうとしました。その時ステパノのしたことは十字架上のイエス様のように、自分を殺そうとする人々をとりなし祈ることでした(60)。なぜ彼は奇跡的、英雄的なことができたのでしょうか。

一、とりなすというライフスタイル

「父よ、彼らをおゆるしください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです」(ルカ23・34)、無実にもかかわらず処刑されようとしているイエス様の口から出た最初の言葉です。主は山上の説教で「敵を愛し、迫害する者のために祈れ」と言われましたが、それをここでは文字どおりご自分の言葉で実践しておられます。十字架につけられた当初、ふたりの犯罪人は一緒になつてイエス様をののしっていましたが、この祈りの言葉に犯罪人のひとりとは心揺さぶられ、イエス様に悪口を言うことをやめました。自分をののしり、苦しみ、死に追いやる相手を心から赦し、神にとりなすなどというのは人間のできることでではなく、神わざであると悟りました。だからこれは「神に対する神の祈り」とも言われます。

実は私たちのひとりびとりのために、十字架の上でイエス様が祈ってくださいました。私たちが神を無視して自分の思うままを歩んで罪を重ねていた時、主はこのように祈っておられました。主は現在も、私たちのために執り成しの祈りをしておられます。救われるために、イエス様のように変えられるように、私たちをとおして救

われる人が導かれるように。さてあなたは60節の祈りを、誰に対してするでしょうか。

二、赦すというライフスタイル

〈主よ、どうぞ、この罪を彼らに負わせないうで下さい〉、ステパノが死に追いやられながらも、イエス様と同じとりなしの祈りができたのは、日常的に自分から赦す生き方をしていたからではないでしょうか。キリストの十字架は、ご自分は何も悪くないのに、神に謝れない私たちに代わって謝っている姿です。相手が謝ってこなくても、赦してしまうのがクリスチャンの姿ではないでしょうか。

「十分に霊的でありさえすれば、痛みや罪に悩まされることはない」「クリスチャンは痛みや罪とは無関係のはずだ」という考えは、聖書的に正しいこととは言えません。なぜなら私たちは生まれながらにして罪の性質を受け継いでおり、救われたからといって、罪深さがなくなってしまうわけではないからです。イエス様が心の内にいてくださいますから、大それた罪を犯すことはないですが、もう罪を犯すこととは全く無関係になったと考えるのは行き過ぎです。心のたががゆるんだ時、ストレスがたまった時、疲れや空腹を覚える時、うっかり罪を

犯してしまうということがあります。そういう時、いたずらに自分を責めるのではなく、自分の罪と向き合い、神の光の下に差し出せばよいのです。自分は霊的なことから罪を犯すはずはないと思ひ込むことは、むしろ罪に足をすくわれやすいものです。

また自分に対して罪が犯されたとき感じる痛みも罪ではありません。人から裏切られた時に怒りを覚えたり、嘘をつかれて傷ついたり、親しい人が亡くなって悲しくなるのは正常な反応です。クリスチャンだから平気ではないはずだというのは、人間性を無視した考えです。否定的な感情を覚えた時は、それを神の前に注ぎ出し、自分に罪を犯した人を赦さなければなりません。人を赦すまでは過去に縛られ続けるが、赦すことによって過去から自由になることができます。

結論

自分の内面の現実と向き合い、それを受け入れ、十字架の許に持つて行きましょう。主は私たちを回復して下さいます。また信仰の友とそれを分かち合ひましょう。そうしてこそ、赦しと癒しをより実感できるといいます。

研究資料

(宮澤清志)

テキスト

54 これ ステパノの明快な弁明と、イスラエルの人々に対する非難。心の底から激しく怒り 「のこぎりで引かれる」という意味の言葉。非常に強い憤りと敵意とを感じさせる言葉である。

55 この節のステパノの言葉をきっかけにして、それまではらわたが煮えくりかえりながらも我慢していたユダヤ人たちは、いっせいにステパノに殺到し、彼を石打ちの刑にしたのである。つまり、この節のステパノの言葉はそれほどの意味をもった言葉なのである。では、この言葉の何がそれほど重要なのであろうか。実は、イエスは十字架に当たって同じ聴衆に「人の子は今からのち、全能の神の右に座する」(ルカ22・69)と語っている。この言葉によって、サンヘドリンの議員たちが十字架にかけたイエスこそが「正しい方」であった証拠ともなったのである。同時にこの幻は、ステパノ自身にとっても決定的に重要な意味を持つ。この幻では、人の子イエスは神の右の座に「立っていた」。それは、神の右の座に「座っ

て」おられたイエスが、今や愛するしもべステパノの霊を迎えるために立ち上がった姿を見たからであろう。あるいは神の法廷の場において、イエスが立って弁明をしておられる姿を見たのかもしれない。人の子 ダニエル7・13「人の子のような者」から取られたメシヤの称号。実は、イエス以外の者が、イエスに対するこの称号を用いたのはここだけである。

57 人々 サンヘドリンの議員であったのか、それとも一般の群衆であったのかは不明。

58 彼を市外に引き出して、石で打った 石打ちの刑には、一定の手続きが必要であった。この刑は、冒瀆罪や偶像崇拜罪などの極悪人に対する罰であった。刑を宣告された者は、まず「町の外」(居住地の外の刑場)へと連れて行かれ、高い崖の頂から突き落とされる。そこで死ななければ、今度は石打ちによって殺すといわれている。これに立ち合った人たちは、自分の上着を脱いで、サウロという若者の足もとに置いた ステパノが死刑に処せられるためには、2人以上の証人の証言が必要であった。彼らに課せられた仕事の一つは、四人めがけて大きな石(ひとりで抱えることのできないほど大きな石)を落と

すことであつた。この際、証人たちの上着は邪魔になるので、彼らは上着を脱いだのである。サウロという若者ここで、本書の後半の中心人物として登場する「パウロ」が、回心前の「サウロ」という名で登場する。彼は刑の執行人の服を預かった人物として登場する。ここでサウロはステパノの刑の執行に立ち会っていただけでなく自ら賛成していた(8・1)。しかし、ここでの出来事が、後に記すようにサウロの生涯を変える出来事になるとは、誰も想像していなかったであろう。

59 主イエスよ、わたしの霊をお受け下さい ステパノの2つの祈りのうちの一つ。イエスは、十字架にかかりながら、これと同様の祈りをささげられた(ルカ23・46)。しかし、このステパノの祈りは主イエスに対する呼びかけという点で、イエスの祈りとは異なる。それは、イエスこそが私たちの死後の一切を支配される神であるという信仰の告白であろう。

60 自らは石打の刑に処されながらも主の前に祈った祈りのもう一つ。この祈りも、主の十字架上での祈り(ルカ23・34)が背景にあるのであろう。このステパノの祈りもいくつかの点で先ほどのイエスの十字架上での祈り

とは異なる。まず、祈りの対象が主イエスであるということ、そして罪を赦^{ゆる}していたく理由を述べていないということである。それは、イエスこそ人の心の奥底まで知っておられ、その上で裁かれる審判者であることの告白であろう。**眠りについた** 59〜60節を読んでいると、ステパノは、およそ「眠りにつく」という形容とは思えない、壮絶な最期を迎えたのではないかと推測しがちである。しかし、その最期は「眠り」と表現できるほどの平安があつた。それは、彼が心底から自らを主のみ手に与えきつたことの結果であり、主イエス・キリストの福音の確かさを確信し、心底から死の備えをすませていたからに他ならない。

最後に、パウロの登場の意義を再度確認する。アウグスティヌスは「もしステパノが祈らなかつたら、サウロは回心させられなかつたであらう。」と語つたそうである。サウロの登場は9章を待つてのことになるが、ステパノの祈りは決してむなしく地に落ちることはなかつたのである。

参考図書 榊原康夫「聖書講解 使徒の働き 上巻」(いのちのことば社)他。

聖書

使徒7・54〜60

タイトル

天を見上げて

暗唱聖句

ああ、天が開けて、人の子が神の右に立つ

目 標

ておいでになるのが見える。使徒7・56

天を見上げ、キリストを証しする生涯を送る。

導入

(後藤 真)

「殉教」ということばを聞いたことがありますか。

難しいことばですね。殉教というのは、イエス様を信じる信仰のためにいのちを失うことです。日本の法律ではどんな神様を信じてもよいということになっていますので、殉教ということは、関係ないように思うかもしれません。でも世界を見れば、去年一年間で殉の人たちがイエス様を信じているために殺されたと言われています。わたしたちは、いじめられ、おどされ、いのちの危険があつてもイエス様を信じていることができるでしょうか？

ステパノ

今日読んだ聖書は、人々がステパノに石を投げつけて殺してしまうという恐ろしい場面でした。石を投げつけ

るとするのは、とても重い罪をおかした人を死刑にするやり方でした。特に、神様をおとしめたり、他の神様を拝んだりした人に対する罰でした。でもステパノは石を投げつけられるような悪いことはしていませんでした。

ステパノは、使徒たちがお祈りとみことばのご用に集中できるよう、教会のいろいろな仕事をするために選ばれた7人のうちのひとりでした。今の教会なら、役員さんに当たるような人です。ステパノは、教会の仕事をしながら、イエス様を伝え、奇跡も行いました。そしてますますイエス様を信じる人が増えていったのです。

ステパノの証

ところが、それをねたんだ人たちがいました。旧約聖書の教えや自分たちの言い伝えを大切にしている人たちです。このような人たちはステパノを捕まえて議会に連れていき、嘘の証言をさせて、ステパノが神様をけがすような間違ったことを言っているのだと訴えたのです。

相手が喜ぶようなうまい言い方をして助かることもできたかもしれません。心の中ではイエス様を信じているのだから、いのちを守るために少しぐらい嘘を言ってもゆるされると思う人もあるかもしれません。でもステパ

6月

5日 礼拝メッセージ例

ノは、聖書の教えを守らず、イエス様を十字架につけた人々の罪をはっきりと伝えます。

天を見上げて

これを聞いた人々は、激しく怒りました。自分たちがステパノをさばこうとしているのに、ステパノの方が自分たちをさばいたのです。悔しさと怒りでぎりぎり歯ごしりしました。でもステパノは、自分を憎んで今にも襲いかかるうとしている人たちを見るのではなく、天を見上げました。神様の右にイエス様が立っているのが見えました。「神様の右に人の子（イエス様）が立っているのが見える」というステパノのことばを聞いた人々はついに、「そんな話聞くものか！」と耳をふさぎ、ステパノのところに押しよせます。そして、町の外に連れ出し、がけから突き落として大きな石を投げつけたのです。ステパノは殉教しました。

こんな乱暴をされて、どんなに怖かったです。それでも、ステパノはいのちをかけてイエス様に従うことを選びました。たとえ殺されてもイエス様がいのちを与えてくださることを信じたのです。そして、「主よ、どうぞ、この罪を彼らに負わせないで下さい」と叫びました。

「父よ、彼らをおゆるし下さい」と言った十字架のイエス様を思い出します。

こんなひどい目にあうくらいなら、イエス様なんか信じたくないと思う人もいるかもしれません。でも、そう思わなかった人がいました。サウロという人です。サウロはこのときは、イエス様を信じる教会の人たちをいじめる側にいました。それが正しいと思っていました。でも、このサウロは後にパウロという名前に変えられます。そして異邦人にイエス様を伝える人になります。

イエス様を信じて生きること、死ぬまでではなくても、いじめられたり、つらい思いをしたりすることは必ずあります。教会ではイエス様を信じ、家や学校ではこの世の考えに合わせてごまかすこともできます。でも、それは十字架にかかってだれよりもつらい思いをしてわたしたちを救ってくださったイエス様を悲しませることです。天を見上げましょう。ドキドキすることも、怖いなあと思うこともあるけれど、イエス様の素晴らしさを証ししてゆきましょう。

♪輝かせよ（PW41、イン87）

聖書 IIコリント2・12、17 テーマ キリストの香りとして

序論

(石田高保)

宣教にはいつも困難が伴うが、それを乗り越えたとき必ず実が結ばれることを、パウロは体験していました。ですからコリントの同労者に対して、決して諦めないようにと励ましています。福音宣教の戦いは、勝つか負けるかではなく、あらかじめ勝つことが約束されている戦いを勝ち取るもの、という確信が強調されています。

一、福音宣教の影響力

〈神はいつもわたしたちをキリストの凱旋がいせんに伴い行き〉、パウロを始め福音宣教の同労者はキリストを凱旋將軍とし、自らを従軍しているキリストの兵士になぞらえています。また、宣教の戦いにおいて勝利し、凱旋行列の榮譽だれにあずかっている者とたとえています。

では誰が香りだれを放つて下さるのかというと、それは神です。私たち自身が香るものではありません。どのような香りかという、それはキリストがどんな素晴らしいお方であるかを分かせるといいます。それは必ずし

も直接福音を言葉で伝えることだけではなく、何らかの愛のわざを行うことによるのです。人は愛されること、つまり大切に扱われることによって心を開きます。じっくり話を聞いてもらった、苦しいときタイムリーに助けてもらった、孤独なときそばにいてくれた、など。私たちが主により頼みながら、愛の行為に一歩踏み出すとき、愛された人は普通の人間関係にはない神的なものをそこに見出すのです。つまりキリストの香りがたつわけです。

どんな香りも鼻がすぐ嗅ぐかように、キリストの香りもすぐ人が気づきます。〈わたしたちは、救われる者にとっても滅びる者にとっても、神に対するキリストのかおりである〉、キリストのことを少しでも証しするとき、どちらの人に対しても影響力を持つということではないでしょう。

ただしキリストの香りは結果的に人を二分します。〈後者にとっては、死から死に至らせるかおりであり〉、凱旋行列の香りもかぐ人によって意味が全く変わるといいます。ローマ軍に負けた捕虜にとって、沿道の香りは、処刑か奴隷かの運命をいやがうえにも意識させたことでしょう。その比喩の意味するところによれば〈滅び

る者」とは、主を受け入れようとしなない人のことで、こういう人にとって、キリストの香りは何の魅力もありません。それどころか、やがては死と滅びに至ることも知らないのです。

いっぽう（前者にとっては、いのちからいのちに至らせるかおりである）、凱旋將軍と兵士たちにとって、沿道の香りは勝利の榮譽をいやが上でも増し加えるものでした。この比喩の意味するところによれば（救われる者）とは、主を受け入れた人のことです。こういう人にとってキリストの香りはますます永遠の命を望めます。「おおよそ、持っている人は与えられて、いよいよ豊かになる」（マタイ13・12）とあるとおりです。

二、福音宣教の心がまえ

（いつたい、このような任務に、だれが耐え得ようか）このように福音を語ることによって、聞く人が拒むことによつて滅びに至ったり、受け入れることによって命に至ったりすることになるという務めは、考えてみれば畏れ多いものです。結果については語る人にすべての責任があるわけではありませんが、神に用いられやすいよう自分を整える責任はあります。

では福音を語る場合の心構えはどんなものでしょうか。〈真心をこめて、神につかわされた者として神のみまえて、キリストにあつて語る〉とあります。つまり、神が自分をつかわしたのだから神が責任をとってくださるのだ、という信仰を持つことです。相手にふさわしい内容を神がその場で語らせて下さるという信頼があると、力まないで済みます。また神のみまえて語るとありますから、相手の話を受けとめながら主に尋ねつつ福音を語るということです。教科書的な伝道フレーズを並べるだけでは相手の心に届かないでしょう。双方向の会話により、相手との信頼関係をとおして福音はより力強く届くのではないのでしょうか。

結論

キリストの香りとは、つまるところ福音宣教するとき醸し出される影響力ということができるでしょう。未熟であつても、経験が少なくても、伝えようとする人とおして主は著しく働いてくださいます。自分を整えてから伝えるのではなく、伝えつつ自分を整えるという同時進行でよいのです。なぜなら私たちが香ばしいのではなく、内におられるキリストが香ばしいのですから。

研究資料

(小平徳行)

ここにはパウロの任務の性質と神がいかにして、困難の中にもかかわらず、彼の宣教の働きを支え、祝福して下さっているかが語られている。これは本書簡の全体に流れている主要テーマである。

テキスト

12〜13 トロアス エペソの北方にある町。「トロアス」とは「トロイの近く」という意味である。アレクサンドロス大王が自分の名に因んで「アレクサンドレイア」と付けた町はいくつかあり、それらを区別するために、この町は「トロイの近くの」という修飾語が付けられた。それを通称「トロアス」と呼んだ。パウロの時代において重要な港町であり、商業の中心地であった。門が開かれた これは伝道の門戸が開かれたことを意味している。エペソ伝道の時にもこのような表現が使われ（Iコリント16：8）、エペソに教会が生み出されただけでなく、コロサイやラオデキヤなど、その地域の他の都市にも福音がもたらされることになった。トロアスもそのような可能性を秘めた伝道地であったかもしれない。兄弟テト

スに会えなかったので、わたしは気が気でなく、ここでパウロはコリントに遣わしていたテトスに会うことを期待していたが、それができずにコリント教会の事を思っ
て心配していたのである。そこで有望な伝道地であったトロアスを後にしてマケドニアに渡り、テトスと会うことができ、教会の状況を聞いてパウロは安心したのである（7・5〜16）。いかにパウロがコリント教会のことを親身になって心配していたかがわかる。

14 神は感謝すべきかな ここまで幾分重苦しい記述が続いたが、ここからは、感謝にあふれて、神がいかなる時にも、あらゆる場所で、パウロが効果的な働きをすることができるようにして下さったことが語られている。
キリストの凱旋に伴い行き これは古代ローマにおける戦争の勝利の後に行なわれた凱旋行列（勝利の行進）を念頭に置いている。凱旋將軍と兵士がローマに帰ってくる際、おびただしい敵の戦利品や、鎖につながれた捕虜たちがその後が続いていた。ちょうどこれと同じように、いかなる困難の中にあつても神はパウロと彼の同労者たちを、凱旋行列における勝利した兵士として導いてくださるのである。ここはパウロが自分自身や同労者を（キ

リストの恩寵に捕えられた」捕虜という立場に置いてい
ると解釈する学者もある。それ自体はとても大切な視点
であるが、文脈から考えると不自然ではないかと思われ
る。大切なことは、いかなる困難にもかかわらず、キリ
ストにあつて勝利者であるということである。わたした
ちをとおしてキリストを知る知識の¹⁷かおりを、至る所に
放つて下さる。凱旋行列の道の所々には神々にささげる
香がたかれて、よい¹⁸かおりが天に立ち上つていたように、
パウロが福音を真心をこめて、キリストにあつて語る時
(17)、キリストを知る知識のかおりが広がっていく。キ
リストを知ることが救いのための中心的な事柄である。
15〜16 救われる者にとつても滅びる者にとつても 凱
旋行列における香は、勝利した將軍や兵士たち、そして
彼らを歓迎する観衆にとつては喜びを連想させるかおり
となり、捕虜とされた者にとつては、彼らを待ち受けて
いる奴隷や死を連想させるものとなる。同様に、福音が
語られる時、人々はそれを受け入れて救われるか、受け
入れないで滅びに至るか、二通りの応答に分かれる。
いったい、このような任務に、だれが耐え得ようか。こ
の務めは人々に非常に厳肅な結果をもたらすゆえに、パ

ウロであつても、自分がこの務めに不適格だと叫ばず
にはおれない。しかし、神が選ばれ、必要な力を与えて下
さるがゆえに適格な者として、この務めを果たすことが
できるのである(3・5)。旧約時代のモーセもしかりで
ある(出エジプト3・10〜14)。

17 神の言を売物にせず 「売物に」するとは「行商す
る」が原意。当時の行商人がその場限りの不誠実な商売
をしたことを背景としている。新改訳では「混ぜ物をし
て売る」。当時、このような人々が大勢コリント教会に
潜入していた。彼らはパウロの語ったことを否定し、ユ
ダヤ教的、異教的教えを混ぜていたのである。神の言で
ある福音には何物も付け加えてはならないし、差し引い
てもならない。

参考図書 山中雄一郎「コリント人への手紙」『実用聖書
注解』、尾山令仁「コリント人への手紙第二」『新聖書注
解』(以上のちのことば社) The IVP Bible
Background Commentary: NT, Colin G. Kruse, 2
Corinthians (The Tyndale New Testament
Commentaries) など。

聖書

Ⅱコリント2・12～17

タイトル

キリストの香りとして

暗唱聖句

わたしたちをとおしてキリストを知る知識のかおりを、至る所に放って下さる。

Ⅱコリント2・14

目標

キリストを知る知識の香りを放って生きる。

導入

(水野晶子)

今日は「花の日」「こどもの日」です。アメリカのある町の教会から始まった記念日です。

一八五六年、今から一六〇年も前のことですが、六月の第二日曜日に、リボンで結んだたくさんのお花を教会堂に飾り、大人と子どもと一緒に礼拝をささげました。その教会のレオナード牧師が、この年七歳になった子どもたちの名前を呼んで、一人一人の頭に手を置いて祝福を祈り、名前と生年月日と牧師のサイン入りの聖書をプレゼントしました。これが最初の「花の日」「こどもの日」の礼拝でした。礼拝後、飾られた花を持って、病気の人のお見舞いやお世話になっている人たちに、お礼に行く

ようになって、花の日が広まって行きました。

私たちの香り

花の香りはとてもすてきです。心を和ませ、元氣を与えてくれます。私たちの香りはどんな香りでしょうか？ガムを噛んだときのようにさわやかな香りでしょうか？シャンプーやせっけんののように清潔な香りかな？それとも汗臭い？靴下の泥くさいにおいかな？自分にも周りの人にも、よい香りと感じるものもあれば、鼻をつまみたくなるような嫌な臭いもあります。外側だけでなく、あなたの内側から放たれる香りはどうでしょうか？

キリストの香り

イエス様の時代に、ローマの將軍と兵士が戦いから勝利して帰ってくると、人々は道に香をたいて神々に感謝をささげました。しかし行列の後ろには奪い取ってきたものや捕らえられた人々が鎖につながれていました。この時の香りは勝利した人々にはうれし心地よい香りですが、負けた日本人にとっては、殺されるか奴隷になるかを感じさせられるとってもいやな香りとなりました。

このことにたとえて、パウロさんは、イエス様のこと、救いのこと、福音を、真心込めて語る時にキリストを知

6月

12日 礼拝メッセージ例

る知識の香りが広がっていくことを手紙で知らせました。

キリストの香りはイエス様を救い主と信じた人々にとつては、神様の愛を感じ、勇気と希望を与える香りとなりました。イエス様を信じない人々は、この香りには何の魅力も感じないし、恐ろしい死と滅びに至るという事も知らないのです。だから、イエス様を信じてほしいと真心から伝えるのです。しかし信じて救われる人と、受け入れないで滅びに向かう人の二つに別れてしまうことは、とつても辛くて耐えがたいことだとパウロさんは言いました。でも、神様が必要な力と愛とを与えて、務めを果たすことができるようにしてくださいなのです。

例話

テリー・ヘイファーという気が短くて、すぐ手を出す少年がいました。ブラック・コブラという不良グループに入つて、いつもナイフを持ち、黒のジャンパーを着て、気が荒く、家族や周りの人たちをハラハラさせていました。こんなことを続けていてはいけなと思っています。テリーは、高校一年の夏に教会のバイブルキャンプに参加し、イエス様を信じました。新しく生まれ変わったテ

リーはクリスチャンにふさわしい生活をしようと決心しましたが、不良仲間が再び仲間に引き入れようとやってきて、「クリスチャンのおまえとどっちが強いか試してみようじゃないか」と、決闘を申し込まれました。公園で、付き添いは三人、ナイフなしでこぶしでの戦いとのことで、断れず、教会に相談に行きました。牧師は「約束の場所に行つても決して戦わないこと」と教え、Ⅱコリント2・14、15を読んで祈りました。テリーは、何度もこのみ言葉を口ずさみながら、決して戦いませんでした。決闘にならないことに腹を立てた相手は、使わないと約束したナイフを取り出し、襲い掛かりテリーの腕にナイフが刺さりましたが、テリーは手を出しませんでした。一週間後、あの不良少年が「クリスチャンにどうしたらなるか、教えてほしい」とやってきたのです。なんと、キリストの香りが周りの人の心を動かしたのです。

(シヨートメッセージ一〇〇より抜粋)

私たちもイエス様のことをよく知つて、イエス様のよ

うに愛に生きるとき、キリストの香りは周りの人々に届けられます。

♪シャロンの花♪ (新聖歌268)

聖書 ルカ15・11～24 テーマ 神に立ち返る

序論

(福井文彦)

有名な「放蕩息子のおとこ」として知られている個所です。たとえの中心は放蕩息子のように思われますが、真の主役は父です。「死んでいた」のも同然の息子を迎へ入れる父の姿を通して、この物語ほど天の父なる神の愛を豊かに表しているおとこはありません。この話を通して、私たちの本当の幸せは神にあることを教えられます。

一、父を離れて

弟息子は、父の存命中に遺産相続を要求し、与えられた財産全部を早速お金に換えて、父を離れ遠い所へ旅立ちました。ところが、そこで放蕩の誘惑にとらえられ、全財産を使い果たしたのです。

弟息子がすべてを使い果たした時、その地方にひどいさきんがやってきました。彼はたちまち困窮して、ある人の所に世話になろうとしました。しかし、世間は甘くないもので、その人は彼に豚を飼わせたのです。イスラ

エルでは豚は汚れた動物ですから、豚飼いは奴隷の仕事でした。彼は屈辱的な仕事についたのですが、それでも食べることに窮してしまつたのです。彼は豚の食べるいながら、ごまめを食べたいと思うほどでしたが「それをくれる人はいなかった」(16節直訳)のです。

何が問題だつたのでしょうか。誘惑に満ちた悪い環境、あてにならない表面的な人間関係、予期せぬ自然災害でしょうか。しかし一番の問題は彼が自由を求めて父から離れたことでした。この弟は父の心を知らず、父の気持ちを完全に無視しました。彼の関心は父のことより財産であり、人よりもまず自分のことであり、父との関係を煩わしく思い、父を離れたのでした。

二、父のもとへ

弟息子は食べ物にも窮し、豚飼いの仕事をしてやっと餓死を免れていました。しかし、空腹で汗と埃にまみれ、豚と一緒に暮らす惨めなどん底の生活でした。そんなある日、つくづくと我が身をかえりみ、彼は「本心に立ちかえって」、今まで気づかなかつた自己を見出したのです。このような状況に至つたのは環境や自然災害や人の関係ではなく、自由を求めて父のもとを離れた自分

勝手な生き方にあつたことに気づいたのです。

彼はふと思い起こしました。「父のところには食物の
あり余っている雇人が大ぜいいるのに、わたしはここで
飢えて死のとしている」と。とにかく家に帰つて「父よ、
わたしは天に対しても、あなたにむかつて、罪を犯し
ました。もう、あなたのむすこと呼ばれる資格はありません。
どうぞ、雇人のひとり同様にしてください」とお
願ひしよう。

彼は自分の人生の悲惨さを認め、その原因である自分
の罪を告白して（悔い改めて）父に帰ろうと決心したの
です。本来ならば到底赦されないのであるが、父の情
けによつて雇人の一人にでもしてもらおうと決心するの
です（黙示録2・5）。

三、迎える父（神）

このたとえ話のクライマックスは、放蕩息子を迎える
父の愛です。弟息子は、〈そこで立つて、父のところへ出
かけた〉のです。彼にして見れば、父から離れて遠い所
へ行った時のことを思えば、どの面下げて帰ればよいの
か、とても父に合わせる顔もなかったでしょう。

しかし、父は日々、首を長くして、息子の帰りを待つ

ていたのです。父は変わり果てた姿の息子を遠くから認
め、走り寄り、首を抱いて接吻しました。それだけでは
ありません。息子のざんげのことは最後まで言わせ
ず、最上の着物を着せ（新しい品性）、指輪をはめ（子と
してのしるし）、くつをはかせました（新しい歩み）。

さらに、〈肥えた子牛を引いてきてほふりなさい。食
べて楽しもうではないか。このむすこが死んでいたのに
生き返り、いなくなっていたのに見つかったのだから〉
と、盛大な祝宴が開かれました。

こうして、父から離れ豚と一緒に暮らす惨めなどん底
の生活をしていた放蕩息子は、父の愛で満ち足りたので
す。

結論

神から離れた人生は放蕩息子のように幻滅に終わります。
しかし、神のもとには真の幸があります。その神
のもとに帰るために、すでに父の側で一切の備えが出来
ています。それがイエス・キリストの十字架です（ヨハ
ネ19・30）。ただ、私たちが悔い改めて、父の元に帰るな
ら無限の愛をもって迎え入れてくださり、だれでも満ち
足りた本当の幸いな人生を送らせてくださるのです。

研究資料

(小平徳行)

15章全体は、3つのたとえ話から成っている。全体としてのテーマは「失われたものを取り戻す喜び」である。その中で、ここは罪人を赦す神の愛のたとえ話と言うこともできる。イエスはここで福音の全体を語ったのではなく、福音の主動力となる神の赦しの愛について語っている。また、先の2つの話では、捜す神が、ここでは、帰って来るのを待っている神が描かれていることから、人間が神のもとに帰ることの必要を教えている。

テキスト

12 わたしがいただく分 遺産の分配は長子が他の兄弟の二倍となる。したがってこの場合、弟息子は父の遺産の三分の一(申命記21・17)である。遺産の分配を父の存命中に求めることは当時法外なことで、「父よ、わたしはあなたがすでに死んでいればよかった」と言うことに等しかった。父の生存中に分けた場合、長子の分は父の死まで父の手中にあり続ける。

13 全部とりまとめて 新共同訳では「全部を金に換えて」。彼が何も残さないで出て行ったということは、や

がて帰ってくるという可能性は一切考えていないということであり、また父親を顧みる気持ちも一切ないということである。遠い所 そこでは豚が飼われていることから、異邦人の世界へ行ったということである。

15 豚を飼わせた 律法によれば豚は汚れた動物とされていた(レビ11・7)。従ってユダヤ人は普通の状況では豚を扱うことは決まらなかった。この時、弟息子は豚の世話を考えなければならぬほど、絶望的な困窮にあったのである。

16 何もくれる人はなかった 人々の弟息子に対する扱いは豚以下であった。

17 本心に立ちかえって 困難は人を現実に向き合わせる手段となる。彼は父のもとでは雇い人さえも食物があり余っていたことを思い起こし、父のもとにあることのはかり知れない豊かさとの自分のみじめさに気づいたのである。

18 19 天に対しても 「天」とは神に対する敬虔な思いから来る遠回しな表現。弟息子はまず神に対して罪を犯したことを認めている。罪はいつでも、人に対する以上に神に対するものである。もうあなたのむすこと呼ば

れる資格はありません 父親に対する非礼のゆえに、息子として扱われるべき者ではないと考え、最低、生活でさるだけの賃金を得るために、雇人のひとりにしてもらおうとした。

20 父のところへ ここで「彼の故郷へ」とか「彼の家へ」ではなく「父のところへ」と言っているのは、父との関係の回復に焦点が当てられているからである。まだ遠く離れていたのに 父親は息子の帰還を期待し、目を凝らして待っていたのであろう。哀れに思っ(ギ)スランクニゾマイ) この言葉は「はらわた」から来ており「はらわたを突き動かされる」という意味である。この言葉は、これ以外にはキリストがあわれみを示される時に使われている(マタイ9・36、14・14、15・32、20・34など)。走り寄り 父親が走り寄るとしたのは、古代オリエントの民族からすれば驚くべきことであった。接吻した 厳密には「何度も接吻した」とか「愛情込めて接吻した」と訳すことができる言葉で、父親がうわべだけでなく心から息子を受け入れたことを示している。

22 最上の着物 社会的地位を表す。指輪 印章にも用いられ、権威を表す。はきもの 自由の象徴。奴隷は普

通、はきものをはかなかった。これらのものは、帰って来た息子を雇い人としてではなく、真に息子として迎え入れていることを表わしている。

23 肥えた子牛 特別なもてなし用に飼育されたもので、ここで用いたということは、これ以上にふさわしい機会を決してないと判断したからである。これは町民全体にふるまうに十分な量であったゆえ、この祝宴は大規模なものであっただろう。上流階級の家族はしばしば、息子の成人、結婚に際し、町民全体を祝宴に招待した。

24 死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったのだから ここに父親のあふれるばかりの喜びが表現されている。神のもとを離れた人間は、肉体の命があっても、霊的には死んでいるのである(エペソ2・5)。祝宴 イエスが神の国の象徴として好んで用いている(13・29、14・15、24)。

参考図書 熊谷徹「ルカの福音書」『実用聖書注解』(いのちのことば社)、The IVP Bible Background Commentary: NT, Leon Morris, Luke (The Tyndale New Testament Commentaries).

聖書

ルカ15・11～24

タイトル

神に立ち返った放蕩息子（父の日）

暗唱聖句

このむすこが死んでいたのでに生き返り、
いなくなっていたのに見つかったのだから。
ルカ15・24

目標

神のもとに真の幸いがあることを知り、
神に立ち返る者となる。

導入

（松浦みち子）

今日は「父の日」です。あなたのお父さんはどんな方でしょう。今日の聖書のお話しは、深くて広い大きな愛に満ちたお父さんと息子の物語です。

家を出た息子

ある所に、お父さんと二人の息子が住んでいました。家にはたくさんさんの雇い人がいて、野菜作りや牛、羊などの世話を忙しくしていました。息子たちも家の仕事を手伝いながら毎日を過ごしていました。ある時、弟息子はふと、つぶやきました。「あーあ、いやになっちゃうなあ。毎日毎日、お父さんの言うことをきかなくっちゃあ、つまんねーな。何か面白いことはないかなあ。こんな田

舎じゃなくって、にぎやかな町に行つて思い切り遊びたいなあ。」そう思うと、いてもたってもおられず我慢できません。「そうだ！ お父さんにお願ひして、僕の分け前をくださいと言おう」。そこで、さっそく弟息子は「お父さん、お願ひです。僕は町にいきたいのです」。お父さんは配顔をしながら「大丈夫かい？ 本当に一人で暮らしていけるのかい？」そう言いながら弟息子の願ひどおりに財産を分けてあげました。弟息子は幾日もたたないうちに、もらった物を全部とりまとめて遠い所に旅立ちました。「もう、畑仕事もしなくていいんだ。お金もたくさんあるし、自由に楽しく暮らせるぞ！」弟息子は足取り軽く意気揚々と家を出ていきました。遠い町に着くとめずらしいものが一杯です。働きもせず、幾日も幾日も遊びほうけていました。ご馳走もいっぱい食べ、人にも気前よくおごって、友達もたくさんできました。やがて、湯水のようにつかったたくさんのお金も底をついて一文無しになってしまいました。「何とかなるさ、友達もいっぱいいるしな。アルバイトでもしようかな。」なんて気楽なことを考えていましたが、頼りにしていた友達も、お金がなくなったとたん冷たくなり、離れていつて気づい

た時には一人ぼっちになってしまいました。しかも、その地方に飢饉ききんが起こり、食べる物もなくなり、アルバイトどころではありません。やっとの思いで見つけたのは豚の世話をする仕事でした。「あー、お腹がすいてペコペコだ。豚のえさのいなご豆でもいいから食べたいなあ」。そう思つて餌に手をやると「ぶーっ!」と豚が怒つて突き飛ばします。息子はいくらめしく餌を眺めるばかりです。

はっ、と気づいた息子

その時、弟息子は、はっと我にかえりました。「そうだ! お父さんのところには食べ物がたくさん有り余っているのに、僕はここで飢えて死のうとしている。ああ、僕は今までなんてばかだったんだろう。家に帰つてお父さんにあやまろう。もう、あなたの息子と呼ばれる資格はありません。」と。

迎えてくれたお父さん

息子は長い間お父さんのことを忘れていました。ところがお父さんは片時も忘れません。息子の帰りを今か今かと待ち続けていました。毎日地平線のかなたを見つめながら「いつ帰ってくるだろうか」と息子の姿を探していました。そんなある日、はるか遠くとほとほと歩く人

の姿を見つけました。お父さんは、きつと息子にちがいない!と走りよつていき、ボロボロ姿の息子をしっかりと抱きしめ迎えたのです。「お父さん、わたしは天に対しても、お父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。雇い人のひとり同様に……」お父さんは最後まで息子に言わせないで召使いに命じました。「さあ、早く、最上の着物を着せなさい。指輪をはめさせ、靴を履かせなさい。肥えた子牛をほふりご馳走を用意しなさい、今日はお祝いだ! 息子が死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのにみつかったのだから。」

天の神様はこのお父さんのような方です。私たちが帰るのを今か今かと待っていてくださるのです。神様の所に帰る方法はただひとつ。自分の罪を悔い改め、赦ゆるしを求めることです。さあ、私たちも神様の所に帰りましょう。それが、人間にとって一番幸いな所です。「神が人と共に住み、人は神の民となり、神自ら人と共にいまして、人の目から涙を全くぬぐいとして下さる」(黙示録 21・3-4)のですね。

♪父なる御神に♪(新聖歌449)

聖書 使徒9・1～19 テーマ 天からの光に照らされて

序論

(金井信生)

イエスの復活をありえないことと否定し、これを伝えていたキリスト信者たちを迫害していたサウロは、ダマスコ途上でキリストに出会いました。サウロはこの時を人生の転機として、キリストとの出会いを証しし、イエス・キリストによる救いを宣べ伝える最大の伝道者と変えられました。

一、天からの光の経験

サウロは神に対して熱心な人でした。有名な律法学者であつたガマリエルのもとで律法を厳しく教育され(22・3)、また厳格におきてを守って生活していました。それだけに、律法を越える教えを説いていたイエスに対して反発し、イエスの復活を事実として伝え、おきてを守り行うことなしに救いを宣べ伝えるキリスト信者たちに激しい怒りを覚えていました。それだけ自分の信じ行っているものが確かだと思っていたからです。

しかし、サウロの目の前に現れ、声をかけたのは主イ

エスでした。これまでイエスの復活を作り話と否定してきたサウロにとって、自分のよりどころとしてきた確信の方が空しいものであつたことが明らかになったのです。

8章でエチオピアの宦官^{かんがん}は、聖書を読んでもわかりませんでした。正しい導きを受けて、すぐにイエス・キリストを信じました。反対に、パウロは聖書をわかつているつもりでしたが、神様の救いについて、またメシアについて間違つた導きを受けていたために、イエスを否定してきました。しかし直接にキリストの語りかけを受けて、信じることができました。

その後サウロは、天からの光をもつてイエス・キリストを中心として見定めて、聖書を読み直します。そして、学んできた聖書が、メシアの苦難による救いについて、行いではなく神の恵みによる罪の赦^{ゆる}しについてなど、イエスが救い主であることを示していることがはつきりとわかりました。また、み言葉に導かれて天からの光の中を歩む生涯に踏み出しました。

二、神の愛と赦^{ゆる}しの経験

目が見えなくなつてダマスコに手を引かれてきたサウロのもとを訪ねたのが、主の弟子アナニヤでした。当初

アナニヤは、主からサウロを訪ねるよう示されたとき、恐れていました。しかし、再度のお言葉を通して、神様がサウロを「救いの器」として選んでおられることを示され、出かけていきました。かつて「網を降ろしなさい」との主の言葉に従ったペテロは、大漁に驚き、主の弟子となりました。アナニヤも、「行け」との主の言葉に従ったところに、主の収穫があり、ご計画の確かさが現されました。

サウロは、主イエスの弟子の訪問に驚きましたが、それ以上に驚いたのが、本当なら許すことができない迫害者であり、自分を捕らえにきた男に「兄弟」と呼びかけて近づくアナニヤの姿です。サウロの目からうろこのようなものが落ちたのは、天からの光、キリストの言葉と共に、アナニヤの親しい語りかけのおかげでした。サウロは、「敵を愛し、迫害する者のために祈れ」(マタイ5:44)と自ら実践された主イエスの教えどおりに生きる人に出会い、愛と赦しが実現している、神の国の到来を見ました。

三、新しい人生の発見

サウロはアナニヤを通して、イエスの十字架と復活の

救いを信じただけでなく、神様の与えられた使命について知りました。「律法によつては、罪の自覚が生じるのみである」(ローマ3:20)と空しさを感じながらも突き進んできたパウロは、キリストに従う新しい人生を見出しました。それは自分を頼みとし、誇りとする生き方から、イエス・キリストを頼みとし、誇りとする生き方です。自分が神に愛され、赦されたように、人を愛し、赦し受け入れていく生活です。

サウロは生まれ変わりました。すぐに、イエスはキリストであると宣べ伝え始めます。後にパウロと名を変え、小アジア(今のトルコ)、ギリシャ、ローマに、さらに伝説によればスペインにも伝道しました。

迫害する側から迫害される側にまわり、様々な困難がありました。イエス・キリストによつて救われた感謝と喜び、またキリストに従って生きる確信は生涯失われることはありませんでした。

結論

主がみ言葉を通して、また人を用いて与えられる天からの光に照らされ、キリストを信じて新しくされた恵みに生かしていただきましょう。

研究資料

(小平徳行)

サウロ（パウロ）の回心と召命のいきさつは、使徒行伝に3回記されている（9、22、26章）。これは彼の生涯を根底から覆す一大転機となった。この出来事は初代教会の福音宣教史に欠くことのできない重要性を有している。

テキスト

1～2 なおも サウロによる迫害の様子については8・1、3に記されているが、その後サマリヤ伝道の記事で中断されていた。しかし彼による迫害は、その間も続けられていた。**主の弟子たちに対する脅迫、殺害の息をはずませながら**、どれほどキリスト者に対して激しい怒りに燃えていたかが分かる。やがてサウロはイスラエルの領内にとどまらず、国外に逃れたキリスト者を追跡しようとした（26・11）。**ダマスコの諸会堂あての添書**ダマスコはエルサレムから北北西に約240km離れたところに位置する。当時シリアの中心都市で、ローマの管理下にあり、ユダヤ人の住民が非常に多かった。これは、サウロがダマスコに逃げ延びたキリスト者を逮捕する権限

を得るためのもの。大祭司はユダヤ議会の議長としてユダヤ人に対する権能をローマ政府の承認のもとに持っていたが、国外においてもユダヤ人およびその社会に対して強い権力を認められていたのである。**この道の者**キリスト者に対する本書特有の呼び方（19・9、23、22・4、24・14、22）。それは初代教会が、主イエスに対する信仰を「いのちの道」「救いの道」と考えていたことを示している。

3 天から光がさして 時刻は真昼ごろであった（22・6、26・13）。この光は太陽よりも明るく輝き、主の栄光を示すものであった。この光はサウロの外側を照らしただけでなく、彼の内側を照らし、回心へと至らせ、迫害者を宣教者へと転向させることになった。

4～5 わたしは、あなたが迫害しているイエスである呼びかける声の主は復活されたイエスであった。キリスト者への迫害行為はとりもなおさずイエス・キリストに対する迫害行為であった。このことはキリストと教会が一体であることを示している（ルカ10・16）。教会が苦しむ時、イエスご自身も苦しまれているのである。

6 さあ立つて、町にはいって行きなさい これはサウ

口に対する配慮に満ちた命令であった。この時、サウロは急変した事態に十分に対処する能力を失っていたため、当座なすべきことだけを命じたのである。**あなたのなすべき事** キリスト者とは、自分のしたいことをするのでなく、キリストが望んでいることをする人である。

8 目を開いてみたが、何も見えなかった 神は人間に對し、しばしば、悪しき企てを止めたり、注意を引くために一時的に、目を見えなくすることがある(創世記19・11、列王下6・18〜20)。この時は、サウロに迫害をやめさせるためでもあったが、迫害者への処罰というよりも、サウロの回心と召命に深い内省を与えるための恵みの手段であったといえる。

9 三日間 断食は祈りの時であった(11)。この期間、サウロにとって、これまでキリスト者を迫害して、取り返しのつかない誤解と罪を犯してきたことについての悔い改めと、十字架につけられて死んだはずのイエスが復活したことについて深く考える機会となった。

10 アナニヤ 彼は「律法に忠実で、ダマスコ在住のユダヤ人全体に評判のよい」人であった(22・12)。この件以外では聖書に登場しないが、重要な使命を忠実に果た

したのである。

11 『真すぐ』という名の路地 この街路は今日もダマスコ東西に貫通する通りの一つとして現存し、言い伝えによれば、ユダの家はその西端の近くにあった。

15〜16 わたしの名を伝える器として、わたしが選んだ者である 主はサウロを宣教の器として聖別された。伝える(ギバスタゾー) は「持ち運ぶ」が原意。

17 兄弟サウロよ サウロが迫害者であることを聞いていたアナニヤであったが、主の命令を受けて、兄弟としてサウロを歓迎した。キリスト者の愛と赦しを示す模範である。

18 サウロの目から、うろこのようなものが落ちて、元どおり見えるようになった この時、ただ肉眼が見えるようになっただけでなく、霊の目も開かれたのである。その証拠に、彼はキリストの名によってバプテスマを受けたのである。

参考図書 小野静雄「使徒の働き」『実用聖書注解』、斎藤篤美「使徒の働き」『新聖書注解・新約2』(以上のちのことば社)、I. Howard Marshall, Acts (The Tyndale New Testament Commentaries) など。

聖書

使徒9・1～19

タイトル

天からの光に照らされて

暗唱聖句

天から光がさして、彼をめぐり照した。

使徒9・3

目 標

天からの光に照らされ、キリストによる
新生の恵みに生きる。

導入

(和田 治)

皆さんはこんな賛美の歌を知っていますよね？

♪「誰でもキリストの 内にあるなら／その人は新しく
つくられたもの／古きは過ぎ去り すべてが新しい／主の
内にあるなら すべてが新しい」♪

新しく生まれ変わる！ そんな素晴らしいことがあるんです！ 今日、天からの光に照らされて全く新しい人として生まれたパウロ（旧名サウロ）に注目しましょう。

天からの光が！

「イエスを信じるだけで救われるだと？ けしからん！」
律法を一生懸命に学び、おきてを守って生きてきたサウロ。
「おきてを守ることによってではなく、ただイエスを信じるだけで救われる、だの、イエスは復活した真の救い主だ、

など、でたらめばかり言いおって！」そう思って、クリスチャンを次々に捕まえて、牢屋にぶち込んでいました。さらに、ダマスコのクリスチャンを見つけたい縛り上げ、エルサレムに連れて来る許しをもらったのです。ところが、ダマスコの近くまで来た時、突然、天から、太陽よりももっとまぶしい、ものすごい光が彼を照らしました。「うわああああー！」地に倒れた彼の耳に、こう語りかける声がかえってきました。「サウロ、サウロ。なぜわたしを迫害するのか。」「あなたはどなたですか？」「わたしはあなたが迫害しているイエスだ。さあ立って、町に入り、わたしの命令を待て」。一緒にいた人々には、声は聞こえても、イエス様の姿は見えませんでした。ようやくサウロは起き上がりましたが、目が見えません。手を引いてもらって、やっとダマスコに入り、三日間、何も飲み食いせずに過ごしました。その間、今まで読んできた聖書を、祈りながらじつくりと思い返しました。そして気づいたのです、聖書は「イエスこそ救い主だ」とはつきり示している、と！ 「とてもないことをしてしまっただけ、間違っていたのは私だ！」天からの光の中で彼は、深い悔い改めへと導かれていたのです。

遭わされたアナニヤ

さて、ダマスコにアナニヤという人がいました。主は幻の中で、彼に語りかけました。「アナニヤよ。『はい』『まっすぐ』という名の通りに行き、ユダという人の家を探しなさい。そこにサウロという人がいて、いま祈っています。わたしは幻の中で、アナニヤという人が来て、彼に手を置くと、もどおり見えるようになる、と知らせておいたから」。アナニヤは驚きました。「主よ、サウロですって？あの男はエルサレムのクリスチャンをひどい目に会わせていると、聞いております」。しかし、主は言われました。「さあ、行け！ サウロこそ、わたしの教えを世界中の人々に伝えるために、わたしが選んだ人だ。わたしのために彼がどんなに苦しまなければならないかを、彼に知らせよう」と。そこでアナニヤは、出かけて行ってその家にはいり、手をサウロの上において言いました。「兄弟サウロよ。主のご命令で来ました。あなたが聖霊に満たされ、また見えるようになるためです」。

目が開かれたサウロ

するとどうでしょう！ サウロの目から、うるこのようなものが落ち、見えるようになったではありませんか！

しかも、心の目も完全に開かれ、イエス様を信じる信仰によって新しく生まれ、クリスチャンになったのです。すぐにバプテスマ（洗礼）を受け、食事をすますと、すっかり元氣を取り戻しました。確かに彼は変わりました！ でも、忘れてはなりません。天からの光、イエス様のお言葉と共に、彼を大きく変えたものがあつたことを。それはアナニヤの愛の語りかけでした。自分たちを苦しめ続けてきた人間を、こんなにも愛せるものなのか？ サウロは、「敵を愛し、迫害する者のために祈る本物の愛と赦しゆるの光に打たれたのです。それは、アナニヤの光というよりも、イエス様の愛の光が鏡で反射したかのようにアナニヤから放たれ、サウロに届いたのです」。

結論

新しく生まれたサウロは、神様の力によって、ものすごい勢いでたくさんの人々にイエス様の愛を伝えました。私たちも、聖書のみ言葉によって天からの光を受け、新しく生まれたのです！ サウロのように、救い主イエス様を伝える者、そして、アナニヤのように、天からの愛の光を輝かせる者として生きましょう！

♪すばらしいイエスさまのうた♪（イン39）

牧羊ひろば



神戸大石教会 教会学校

●子どもたちを主のもとへ

神戸大石教会では、初代牧師堀江博先生以来、児童伝道の重荷を持って教会学校の働きを継続してきました。一時は百人以上の子どもが集まり、活発な活動が行われていました。しかし、近年は子どもが減少し、一人も子どもの来ない時代が十年間続いていました。そのようなときにも、一人の教師が毎日曜日にメッセージを準備して待機し、祈っていました。牧師先生ご夫妻、教会員一同も教会学校復活のために祈っていました。

5年前の二〇一一年に金井望牧師一家が赴任し、生徒が4人に増えました（全員金井家の子どもたち）。これが核となって、生徒、教師が加えられ、新しいスタートとなりました。

平日には、お友達がたくさん教会に遊びにくるようになりました。役員会でも、教会で子どもたちが遊ぶこと

を了承してくださいました。広い所で、大勢で安心して遊べるということで、どんどん集まってきました。言葉使いの乱暴な子、いじわるをする子などいても、大人の側の忍耐が必要でした。その中から、何人かが日曜日の教会学校にも出席してくれるようになりました。

ある時、一人の女の子が熱心にマンガ聖書物語を読んでいるので、ふと感じるところがあり、教会学校に誘ったところ、続けて来てくれるようになりました。その子は6年生の夏に兵庫教区バイブル・キャンプに参加し、「洗礼を受ける」と決めて帰ってきました。まだ教会に來はじめてから一年もたっていなかったもので、初めは「早いかもしれない」と迷いました。しかし、祈っていると、「幼な子らをわたしの所に來るままにしておきなさい。止めてはならない」（マルコ10・14）とのみことばが響いてきました。

洗礼準備の学びを経て、いよいよ洗礼の日が近づいてきたころ、洗礼の承諾をいただくために、お母様に教会に来ていただきました。話をしていくうちに、なんとそのお母様が、子どもの頃、大石教会の教会学校に通っていたということが分かり、大変驚きました。

お母様は、大石教会のことを知っておられたので、お子さんが教会学校に通い始めた時から何の心配もなく送り出してくださったとのこと。神様の不思議なお導きに感謝しました。



2012年 子どもクリスマス会 ゲーム

牧師の子どもたちが大きくなるにつれて、CSの人数も減っていくことが予想されます。今、種まきをしなければという思いがおこされ、地域の子どもたちが集うことを願って、子どもクリスマス会を開きました。

初年度は、おそろおそろ小学校の前で100枚の案内を配りました。子どもたちはみんな喜んで受け取ってくれました。そして当日、30人分のプレゼントを用意していたのですが、なんと36人の子どもが集まってくれました。いつも教会学校に来ているお友達に、「あとでもっといいプレゼントを用意してあげるから、今日はがまんしてね」と耳打ちするという、うれしい悲鳴の日でした。

それ以降、毎年楽しみに来てくれる子どもや、孫を連れて来てくれるおばちゃんもおられます。小学校前の案内配りは200枚に増やし、来てくれたお友達には、次の年に案内はがきを送っています。案内は、絵の得意な教会学校の生徒に描いてもらっています。ハンドライティングでかわいらしく、カラフルで、子どもたちも受け取りやすいようです。

クリスマス会の内容は、Ⅰ部は礼拝、Ⅱ部はゲームなどのお楽しみ会です。Ⅱ部の司会は中学生にお願いしています。

スタッフにとっては一年で一番大変なイベントですが、主が背中を押してくださり、ここまで祝され、感謝しています。

その他に、年1回のお楽しみ会を夏に企画しています。あまり背伸びをせず、信徒の方の得意分野を生かしていただいて、できることを考えています。これまでに

- ・ 流しそうめんと木工の作品作り
- ・ コラージュ（貼り絵の作品作り）
- ・ アイスクリーム・パーティー
- ・ 楽しいお茶の会（お茶の点^たて方を教えていただき、和



2011年 子どもお楽しみ会 木工の作品作り

菓子をいただく）などをしました。夏のお楽しみ会、冬のカリスマス会がリンクして、リピーターも増えてきました。信徒の孫、ひ孫の参加もあります。



2014年 アイスクリーム・パーティー

半年ごとにあつという間に成長していく子どもたちを見てみると、小さな働きであっても、続けていくことの大切さを感じます。



2015年 楽しいお茶の会

クリスマス会やお楽しみ会には、たくさんの子どもたちが集まってくれますが、日曜朝の教会学校にはなかなかつながりません。それでも、希望をもって毎回アピールし、祈っています。

現在は、日曜朝9時30分から10時20分まで子どもも礼拝と分級をしています。生徒数は幼小・中高生を合わせて3〜6名、スタッフは3名です。

礼拝では、生徒が司会・献金・お祈りなどの奉仕を交

代でしています。分級の内容は毎月ある程度固定し、以下のように行なっています。信仰の成長と交わりのために有意義な時間となり、且つ、毎回分級の内容を考えることがスタッフの負担とならないためです。

・1週目 祈りのリクエスト（一人ひとりが祈ってほしいことを書いたものを集めて1枚の表にし、一か月祈り合う）

・2週目 お楽しみ（ゲームやおやつなど）

・3週目 暗誦聖句

・4週目 イラスト描き（子どものイラストを用いてオリジナルみことばカードを作成）

子どもたちも楽しんで取り組んでくれているようです。やはりゲームやおやつは、とても喜びます。

教会学校スタッフは、社会人として忙しい生活を送りながらも、主の召しに応じて時間を献げてくださる、若い兄弟方です。

月1回第4主日午後に教師会で、研修と話し合いの時間を持っています。

研修では、まず『実を結ぶ教会学校』（金井由信著、金

井望編著）を少しずつ読んで、分かち合いをしてきました。これが終了したので、次は『救霊の動力』（ウィルクス）を読み進め、ほぼ終りに近づいています。

スタッフ同士で、ありのままの信仰生活の悩みを分かち合い、励まし、祈り、交わりの時間となっています。特に若い兄弟同志で共感できる部分が大きいです。教会学校スタッフ研修の働きが、そのまま教会の将来を支える柱としての次世代訓練につながっているのではな



2013年 洗礼式

いかと感じます。

大石教会では、「継続は力なり」「無理をしない」「与えられているものを生かす」をモットーに、これからも主の助けをいただいて、奉仕していきたいと願っています。どうぞお祈りください。

（神戸大石教会牧師夫人 金井その枝）



2012年 須磨海浜水族園 遠足

おわりに

『牧羊者』二〇一六年度第一巻をお届けできますことを感謝します。また、執筆者のご労苦に感謝いたします。教師養成講座は、前号に引き続き、森沢尚生師に、「聖書の教える人格教育 第二回 人格教育の方法」を執筆していただきました。「牧羊ひろば」は神戸大石教会のCSを紹介していただきました。今号の執筆者、奉仕者を紹介いたします。

『牧羊者』のご購読・ご利用について

* 分級用に、ワークA(幼稚園向け)、B(主に小学生1~3年生向け)、C(主に小学生4~6年生向け)を用意しています。また、付録として「子ども聖書日課」、「フラッシュカード」、「み言葉カード」、「中高科へのヒント」があります。いずれも、下記ホームページから無料でダウンロードできます。送付ご希望の方には、ワークは各600円+税でお送りします。
信徒局 教会教育室 ホームページ
<http://cs.jccj.info/>

* ご注文は、日本イエス・キリスト教団(事務局)まで。申込み、部数変更等のための用紙も、上記ホームページからダウンロードできます。
神戸市兵庫区塚本通3-3-19
電話 (078) 575-5511
FAX (078) 575-6611

聖書講解

研究資料

メッセージ例

ワーク(A)(B)(C)

中高科へのヒント (C) 子ども聖書日課 フラッシュカード

み言葉カード ・イラスト ワークプロ打ち込み

校正

石田高保師

金井信生師

大頭眞一師

宮澤清志師

辻林和己師

松浦みち子師

水野晶子師

鎌野幸師

勝田幸恵師

竹崎光則師

上森恭子師

石田高保師

田中愛子師

丹羽遥姉

佐藤由香姉

丹羽遥姉

多田豊子師

長田栄一師

中島啓一師

小泉創師

福井文彦師

小平徳行師

中島啓一師

和田治師

土屋開夫師

吉田美徳師

山下大喜師

佐藤裕明師

後藤健一師

金田ゆり師

松浦あん姉

金田ゆり師

山下愛師

高橋頼男師

水川武志師

金井由嗣師

飯田勝彦師

後藤眞師

佐川直実師

野勢かほる師

小野淳子師

山田和幸師

加藤清師

山田和幸師

また、事務作業・発送の教団事務所の兄姉、印刷の松木共栄印刷、菱三印刷に心から感謝いたします。(中島啓一)

聖書教育教案誌 牧羊者

二〇一六年度 I巻

二〇一六年四月一日発行

発行所

企画監修

日本イエス・キリスト教団

日本イエス・キリスト教団・信徒局 教会教育室

神戸市兵庫区塚本通三二一一九

電話 (078) 575-5511

FAX (078) 575-5511

印刷所

菱三印刷株式会社

電話 (078) 576-1396

* 日本聖書協会「口語訳聖書」使用許諾済み